
王妃様は逃亡中

遊森 謠子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王妃様は逃亡中

【Zコード】

Z1247Y

【作者名】

遊森 謠子

【あらすじ】

『異世界から召喚された黒髪黒目の女性は、その国の王妃になり世継ぎを生みましたが、郷愁の思いに耐えかねて元の世界へ帰つて行きました』。そんな筋書きになるはずだつたんでしょうねえこの状況。「あなたの役目は終わつた、元の世界に帰れ」？「じょおっだんじやない、日本に帰るのなんかまつひら」「めん！」強制送還回避のため城からの逃亡を余儀なくされたけれど、実は日本での経験から「逃亡慣れ」していた王妃。さてどうする？ 2011・9・9に投稿した短編『王妃様は逃亡中』の長編版です。

プロローグ（前書き）

短編版『王妃様は逃亡中』、たくさんの方に読んでいただき、さらに続編リクエストいただきありがとうございました！ 長編版スタートです。あの短編の背景とその後を、ぜひお楽しみ頂ければと思います

プロローグ

たつた二十数年生きてきただけの人生だけど、幸せなんて長くは続かないものであることを、私は身をもつて知っていた。
まさかそれが日本でも異世界でも通用する法則だったなんて、知りたくもなかつたけどね！

絶体絶命の状況で、私は目の前の男にガンを飛ばしながらそんなことを考えていた。

「王妃様、立派にお役目を果たされたこと、国民を代表してお礼申し上げます。心おきなく、元の世界にお帰り下さい」
目の前の男、祭司長のグレッドが恭しい手つきで、王妃 つまりこの私 の後ろを指した。

背後の大理石の床には、魔法陣が紫色にぼんやりと光っているはずだ。さつき聖堂に入った瞬間に見たからね。

私が日本からこの世界に召還されてきたときの魔法陣とは、微妙に色が違つだけでよく似ている。それに気づいた時にはもう遅くて、数人の僧兵を従えたグレッドが聖堂の入口を封鎖していたのだ。

「世継ぎを生んだら、私は用なし？」

魔方陣を背にした私は、隙をうかがいながら言葉をぶつけた。
くつそお、こいつ初めて会つたときから、なんか企んでるとは思つてたのよ。日本での逃亡生活で磨いた直感を信じればよかつた、あれから一年経つたとはいえ私もヤキが回つたわね。

「これは……私は僭越ながら、王妃様のお悩みをお察ししたままでです。生まれ育つた場所にお帰りになりたいでしょう？」

聖堂の、夜空を透かした水晶の天井に、グレッドの低い声が反響する。

じょおつだんじやない、も「日本なんかまつぱり」めんー。

両親も健在、犯罪者でもない私が、なぜ日本脱出にそんなに喜んだのか。

それは、父が大物政治家で母は有名女優といつ生に立ちに原因がある。そう、私はいわゆる隠し子で、日本ではマスクで隠されていたのだ。

そんな中、この国ハーヴェステスに召還されて穏やかな生活を手に入れて、私がどんだけ喜んだと思つてんの？

「祭司長殿は私に、国王陛下と愛する王子を置き去りにして、帰れとおっしゃるの？」

馬鹿丁寧に尋ねる。

アレ、今「愛する」が「王子」にしかかかつてなかつたよつた。まあ細かいことはいつか。

「（）安心下さい、幼い王子様は私が後見して、立派な王太子にお育て申し上げます」

しゃあしゃあと言ひ放つグレッドは、紫の祭司服に銀の鳴杖めいじょうづを手にしている。理知的な瞳が、意味ありげにこちらを見つめていた。王子を操つて、自分が実権を握るつもりね。ハツ、なんて分かりやすい悪役つぶりなの。それにしても、私が邪魔なだけなら何で殺さな……はつ！

「まさかこの陣に入ったとたんに私、死ぬとかじゃないでしちゃうね！　だいたい帰還の陣があるなんて、聞いたことないわ」

「それは王妃様が、歸る方法について一度もお聞きにならなかつたからです」

ハイソーでしたー！

「でも、なんでこん」「（）心配には及びません」

理由を聞こうとした私の言葉に、グレッドはおつかぶせるように言った。

「王妃様は産後ウツのために、私に頼みこんで魔法陣を発動させ、元の世界にお帰りになる。お優しい陛下だ、そんな理由なら納得して下さるでしょう。後顧の憂いなくお発ち下さい、さあ」

僧兵たちとともに一歩踏み込んできた、その準備万端のドヤ顔がムカつく。ピンヒールのかかとで踏みつけてやりたい、ていうかやる、いつか絶対やる！

私はそう決意しながら、さらりと言った。

「あらそう。それじゃあ、アレは何なのかしら？」

聖堂の入り口の方を指さすと、グレッドはとっさにそちらを振り向いた。

その瞬間、私はくるりと魔法陣の方へ向き直ると、数歩の助走で一気に 魔法陣を飛び越えた。

これでも学生時代は、幅跳びでインターハイ出場したんだからね！

「シーザ様！」

グレッドがあわてた声で、こっちでの私の名前を呼ぶのを背中で聞きながら、祭壇の後に回り込む。指先が床のわずかな引っかかりを探し当て、私は隠し扉を引き開けると飛び降りて扉を施錠した。この王城の中の王族用逃走経路はとっくに確認済み！ 日本での逃亡生活をなめんなよ！

私は太股にベルトで巻いてあつたジッポ（日本から持参した品の一つ。あ、こっち来てから禁煙したけど）に火をつけると、暗い石造りの通路を一気に駆け抜けた。えーっと、右・左・左・もつかい右。つ。

突き当たりの壁に寄せて、用意しておいた大きなショルダーバッグが置いてある。その中からごく普通の綿シャツとスカートを引っ張り出して着替え、ポンチョみたいな外套を羽織つてフードをかぶ

つた。

バッグを肩にひっかけると、頭上の上げ蓋を押し上げる。

そこは王城の裏手の森だった。この出口の辺りは、グレッドは知らないはず。

黒々とした梢の隙間から夜空を見上げ、星に方角を尋ねて、私は走り出した。

くわわ、絶対に王妃の座に返り咲いてやるから覚悟しどけ！
息子よ、ミルクは飲んでもグレッドの言ひとは鵜呑みにするな！
夫よ、あんたもだ！

……つて、いつの世界でも結局、逃亡生活か！

1 王妃召喚（前書き）

1話目と2話目は国王視点です。

1 王妃召喚

「妃が『帰つた』？」

帰城早々、祭司長から内密の話があると言われて人払いした執務室。余は、平伏するグレッドの言葉に思わず立ち上がった。

「余が城を空けている間に、何があつたのだ」

「は……昨夜、王妃様が私の部屋へ、供もつけずにおいでになつたのです」

グレッドは、床に着けていた額を少しだけ浮かせて言った。

「そして、『やつぱり國母なんて無理。もう帰る。帰還の陣を開いて』とおっしゃりながら……短剣を首に

「わが身を盾に、そちを斬したのか」

「いえ、短剣を私の首に」

であろうつな。自分が死ぬより相手を殺す女だ、妃は。

「他にも、『ここにいたら一人目産む羽目になるかもしれないじゃない。あんな痛いの一回だけでたくさん、もづヤダ』とおっしゃつて」

うむ。確かに先日王子を出産する真つ最中に、「一人目なんか絶対産むもんかー！」といつ叫び声を城中に響き渡らせていた。

「しかし……にわかには信じられぬ。妃はニッポンには帰りたくない」と常々……」

逡巡する余に、グレッドは再び額を床にすりつけた。

「他にも『世継ぎを産んだら私は用なし』とつぶやかれ……お心を病んでおられたのかもしれません。それに気がつかなかったのは私の不覚」

その言葉に、余は一瞬言葉を失つた。グレッドは続ける。

「しかし、帰還の陣に入る直前には、陛下と王子殿下の今後を心配なさつておられました。申し訳ありません、お止めすることができず……」

余は執務机の椅子にもう一度深く腰掛けると、額を押された。

「……少し、一人で考えたい」

「は……」

グレシドはゆっくりと立ち上がると、

「私は聖堂で謹慎しております。いかようにも御処分を……」

と言い残して執務室を出て行つた。

おかしい。何かがおかしい。妃らしくない気がするのだが……。

余は、妃と初めて出会つた頃のことを思い返した。

たつた二十数年生きてきただけの人生だが、人間しょせん打算で生きていることを、余は身を持つて知つていた。

それは、我がハーヴの地でも異世界ニッポンでも通用する法則であつたらしい。

余は、ハーヴェステス王国の当代国王である。

我が國の王室には、節目の代の国王が王妃を異世界から迎えると、その子孫が国を栄光に導く、というカビの生えた言い伝えがあつた。百一十代目の曾祖父が召喚を行つてから八十余年、次は百二十三代目の余が召喚を行うことになつていた。

異世界の女性を妻にするといふことは、この国の高貴な身分の女性を妻にしてその実家の後ろ盾を期待する、というようなことができない。そのため、節目の代に国王の座に就くことを「はずれくじ

を引いた」などと揶揄する輩がいることも知っている。

しかし、実は余は、この召喚制度を心中密かに歓迎していた。年頃になつたら召喚が行われると決まつていたために、余の周りでは正妃の座を巡つての争いが起つたことがないからだ。

側妃についても、正妃を召喚した後で選定するか否かを決定すると告知してあつたため、水面下では色々あつたやもしれないが、表立つては平穏なものだつた。

余は、父親である先代国王の妃たちの、醜い争いを見て育つた。実の母である第二側妃が早死にしたのも、その精神的な負荷のせいだと余は思つている。

年頃の女たちは「張り合ひがない」「女を磨く氣概が薄れる」などと顔を合わせてはこぼしているようだが、余は父のように女たちの争いさえも利用して貴族どもの手綱を取る手腕も持たなかつたし、誰か一人の女を愛して「妃は彼女でなくては嫌だ」などという波乱を巻き起こすような情熱家でもなかつた。

後ろ盾を持たない妻を王妃として迎え、平凡な人生を送るという打算を実現できるなら、相手は異世界の人間でも全く構わなかつた。ただ、故郷のすべてから切り離されて、この世界へやつてくる女性の悲しみだけは心配であつた。どんな女性でも、せめて何一つ不自由ない状態で出迎え、希望を聞いて劳わつてやらねばなるまい。祭司長や近衛騎士団長、女官長らと準備を進めながら、余は淡々とその日を待つた。

そして、吉日を選んでついに召喚が行われることとなつた。

聖堂は、建物の半分が水晶で作られている。磨かれ透き通つた天井を見上げると、夜の闇に少しづつ朝の色が混じり始めていた。そんな、世界の清冽さを感じられる時刻。

射し始めた朝の光が祭壇に届き、さらに空になお残る明けの明星の光を鳴杖に戴く呪を唱えたグレッドが、祭壇の前で杖を水平に伸ばしてゆっくりと回転した。

最後に立てた鳴杖で床を一つ突くと、シャン、という澄んだ音とともに夜明けの冴え渡つた空気が振動して、魔方陣が渦を巻くように光りながら開いた。

余は自ら指先に傷をつけると、陣の中へ手を差し出した。
ひとしづくの血が陣の中に落ちた瞬間、魔方陣が強い光を放つた。
。

光が収まつたとき、召喚陣の中央に、余と同じ年頃の女性が立つていた。

化粧氣のない顔はしかし整つていて、黒い瞳が賢そうな光をたたえている。黒髪は無造作に後ろで一本にまとめられていたが、素早くあたりを見回したその動作で、腰までの長さがあるのがわかつた。地味な服の頭巾を後ろに垂らし、ズボンを履いている。

もう一度こちらに向き直つた彼女の固い視線に、余はようやく我に返つた。

すぐに祭司長が、魔精靈であるイルフレートを飛ばした。薄く柔らかい羽が何枚もある、書のような蝶のような形のそれは、言葉の通じない他国人との交流の際に、通訳としての役目を果たす存在だ。一人の言葉の意味をもう一人の意識に働きかけて理解させる、文字通り『意思を疎通させる』能力を持つている。

彼女の髪の結び目あたりにふわりととまつたイルフレートは、異世界人との間の意思も滞りなく疎通させてくれた。

「余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス……」

余が説明し始めるのを遮つて、彼女は「話は聞くから匿つてくれ」という。しつこい男につきまとわれている所だつたそうで、もう追われることはないと言つてやると、いぶかしげにしていた。

聖堂の応接室に場所を移し、この国の召喚の伝統を説明する。

「えーと……まあそういうファンタジーを読んだことがないわけじゃないけど……」

彼女は視線を宙にさまよわせ、しばらく黙りこじってから、

「まあ、夢なら夢でもいいか。覚めるまでひたつてねば」

と妙な納得の仕方をしていた。

一応話を進めるとして、余が国王であつて、十三代目である

ことをもう一度説明すると、彼女は片方の眉を上げて

「なにそのキリ番イベント」

とつぶやいてから、うなずいていた。

「うん、でも、もし夢だとしてもすげー夢だわ。いいよ、王妃になる」

2 王である証拠は“城”？

私と祭司長のグレッジ、そして近衛騎士団長と女官長は、顔を見合わせた。

そもそもこの四人しか儀式に立ち会わなかつたのは、召喚された女性が取り乱すこと前提で、その様子をむやみにさらわないためだつたのだが……この落ち着き様は。

「わかつておるのか？ 有り体に言えど、世継ぎを生めといふことだぞ？」

余が念を押すと、彼女は少し表情を緩め、もう一度どこかことかない仕草でうなずいた。

「うん。私、その……ちょっとすんだ生活を送つてたから、自分は結婚して子どもを生むなんて生活はできないと思ってたのよね。保護してもらひえて、しかも普通の結婚生活を送れるなんて、嬉しいくら……」

国王との結婚を『普通』で済ませるか。

剛胆にもほどがある……いったいどんな生活を送つていたのだろう。

とにかく、彼女はその口眠つていないとじだったのと、一晩経つてから改めて気持ちを聞くことにして と言つてもすでに朝陽が昇つていたが 聖堂に付属する塔の密室を下えて休ませた。

夕刻、聖堂に適当な用事をつけて、こちから彼女の元へ出向いた。

国王自らが出向くのはあまりないことではあったが、彼女から余に王城に会いに来させると目立つてしまつ。この世界の人間はみな、

髪の色は白かそれに順ずる「く淡い色、瞳は紫に属する系統の色。彼女のような黒髪黒目は存在しないのだ。

壮年の近衛騎士団長とともに客室に入ると、窓辺に立っていた彼女が振り向いた。服装は召喚時と同じ。着替えなかつたのか？少し憔悴した様子に、奇妙な話だが余は安堵した。彼女もやはり一介の女人、やつと今の自分の状況を悟つて混乱しているに違ない。

「具合が悪そだが、大丈夫なのか」

余が先に長椅子に腰かけると、部屋にいた女官長が彼女を向かいの椅子に促す。彼女はこちらに近づきながら、軽くため息をついた。
「あまり眠れなくて。ここ、非常階段とか避難ハッチとかないわけ？」逃走経路確保しないで眠るなんて無理だわ、私

「ひなんはつち？」

イルフレートがおおよその意味を伝えてはきたが……バルコニーに、穴？

彼女は余の様子には構わず、向かいに腰かけると余をまっすぐ見つめた。

「さつきは混乱して、簡単に王妃になるなんて言つちゃつたけど、その前に聞きたいことがあります」

やはりな、と余は思つた。

あんなに簡単に、余の妻になることを了承するはずがないのだ。まずは何を尋ねられるか……元の世界への帰り方か、それとももつとしたたかに、交換条件として何かを要求してくるか。

彼女は言つた。

「あなたが王様だという証拠は？」

「……何？」

聞き返すと、彼女は『ぐ真面目な口調で言った。

「口ではいくらでも言えるものね、自分は王様だなんて。証拠を見せて下さい、証拠を」

一瞬呆気にとられてしまったが、それも確かにいつも……か。

「そう、だな……王家の人都には、肩の後ろに十字のアザが」「だから、それを見せられたところでアザが本物かどうかもわからぬし、そもそも王家の人都にアザがあるって言うそれすら、余所からきた私には事実なのかわからない。王家の人都一列に並べて『ほら全員アザが』って言われても同じ」

「無礼な……！」

思わずと言つた風に近衛騎士団長が口を挟んだが、彼女はちらりとそちらへ流し目を送つた。

「だつて、お互困るでしょ。もしも王様の偽物が現れて、『余が本物の王様である、ほらアザもある、余の妻になれ』って言われて、私がそれ信じてそいつの子ども妊娠しちゃつたりどつするのよ。お家騒動もいいところじゃないの」

団長が詰まるところを、余は初めて見た。

「まあ、窓からの景色を見る限り、さすがにここが王城なんだろうつて言つるのは信じます。すうすぎるもん、こここの建物群。あとは、あなたよ」

確かに、余は凡庸ゆえ、一日で王と分かるほどの威厳をまとつているとは思わないが……人間より建物を先に信じるか。

「どうしようと？」

興味深く思つて尋ねると、

「ここが王城であるという前提で、だけど、きっと王族専用の隠し通路とかあるんじゃない？ それがあなたが知つていて、教えてくれたら、信じられるわ」

彼女は挑戦的に余を見た。

「私が王族の一員になるなら、教えてもかまわないでしょ？」

聖堂に連れて行き、祭壇の裏の隠し通路を教えると、彼女はようやく納得したようだつた。

「本当に王様なのね。じゃ、よろしくお願ひします」

彼女はその時になつてやつと表情を和らげ、初めて笑顔を見せた。この女性は、美しい妃になるだらう、と思つた。

しかし同時に、余は少しほんの少しだが、落胆していた。先代国王の妃の座を争つていた、女たちのことが頭をよぎる。結局、彼女も、余が国王だからこそ、保護と引き換えにこうして打算で結婚するのか。

こちらが一方的に召喚したにも関わらず、余は勝手に夢を見ていたのかもしれない。

余のためだけに召喚され、余だけを見てくれる女性を。

椅子を回し、窓の外を眺めた。彼女が一目で城と信じた、いくつもの尖塔を抱えた白い王城、それに付属する建物や庭園が、どこまでも広がる。

そう、余と妃は、本当の意味で心が通つてていたわけではなかつたのだ。

彼女が余に一言の相談もなく帰つてしまつたのだとしても、責められるものではない。

「シーゼ……」

余は、彼女のいぢからでの名を、静かにつぶやいた。

3 王妃様の黒歴史

はー、情けないけど何だか懐かしいよ、この逃亡生活。

私はせつせとオールで舟を漕いでいた。

城を脱出した後、いつたん城下街に出た私は、貸し馬屋のおっさんを叩き起こして馬を一頭借りるという目立つ行動を取つた。そして馬のお尻をひっぱたいて街道に放し（ごめん）、逃げたように見せかけておいてから、川に出て小舟で城を離れたのだ。

即座に多方面に追手がかかるようなことはないだろうと踏んでの行動だつたけど、当たりだつたかな？ だって王妃が元の世界に帰つたつて見せかけたいなら、あまり大騒ぎにはできないもんね。犯罪者を追いかけるのはわけが違う。

いやーしかし、王妃が手こぎボート漕いで逃げてるなんて、きっと誰も思わないだろうなー。

そう……一年前に日本からハーヴェーステス王国に囚還されたときも、私はやっぱり逃亡している真つ最中だったのよね。

私は日本での生活を思い返した。

生まれてすぐに母方の祖母に預けられた私は、両親は死んだものと思いこんで育つた。ところが十六の年、祖母がこの世を去る時に、とんでもない出生の秘密を言い遺したのだ。

私の父は大物政治家で、母は有名女優。私は、隠し子なのだと。自分は両親の若いころの過ちでてきて、そして捨てられた子だったのだ。それは、思春期の少女には重すぎる事実だった。

祖母の死後、寂しさも相まって私は非行に走った。煙草に酒は当たり前、男女問わず知り合いの家を転々とし、夜の街をフラフランしては補導される。

当の両親はどうしてるかって？ 毎日テレビで見かけてたから、生きてるのは知つてたけどね。

「ああ、今日も元気に汚職つてるな」「ああ、今度はお色気系の新境地開拓したのねオメデトウ」って、まあそんな感じ？

もしも今、自分が子どもだと名乗り出ても、父は党首選の真っ最中で足の引っ張り合いに利用されるだけだろうし、母は若いころのスキヤンダルなんか封印したいに決まってる。

はいはい、もう勝手にやつてちょうどいい。むしろ表舞台から姿を消すような何かをやらかしてくれないかな、そうすれば私みたいな隠し子なんか、世間的にどうでもよくなるし。

そんな風に荒んでいた私が、からつじて犯罪にだけは手を出さなかつたのは、祖母の「親はどうあれ、あんたは何も悪くないんだから、自分を貶めちゃいけないよ」という遺言が胸にあつたからだ。

おばあちゃん、大好きだったおばあちゃん。

でもね、一つ突っ込ませてもらうなら、私が静かな人生を送れるよ！ つけて『静子』って名前をつけてくれたけど、そりゃ無理だわ！

ある日、夜の街で酔い潰れた私は警察に保護された。その時に優しく諭してくれた警察官にほだされ、私は涙ながらに自分の素性をしゃべってしまった。

そしてその警察官は、うつかりだかわざとだか知らないけれど、雑誌記者に私のプライバシーを漏らしやがった、らしい。

翌朝警察署を出たところを、記者につかまりそうになつたから。

警察官でさえ信用できなくなつた私は、もうグレてる場合ではなくつた。このまま身を落としたところをフランキーされて黒歴史

が暴露されたら、私みたいな小娘一人、簡単に社会的に抹殺されちゃうじゃないの。

高校だけは友人の助けもあってどうにか卒業したけれど、それは同時に私のギリギリな逃亡生活の幕開けでもあった。

名を変え仕事を転々として、数年の月日が流れた。

ある日の明け方、私は疲れた身体を引きずつてアパートへの道を歩いていた。その頃は深夜のオーニギリ工場で働いていたので、帰りはいつもそんな時間。

何でこの仕事を選んだかつて、世間の人と違う時間帯に行動できて、さらに食品関係は仕事中に帽子とマスク着用だから顔が隠せるじゃない？ 他人に顔の印象を残したくなかったのよね。

アパートが見えたあたりで、私はいつもの癖で、あたりにさつと目を走らせた。

そして、向かいの公園の植え込みに、首からカメラをぶら下げた人影があることに気づいた。

さりげなく一本手前の道を折れる。ちつ、とうとう家がバレたか。

こんな時間じゃ知り合いの家に転がり込むわけにも行かないし、ひとまず漫喫かファミレスにでも……と思いながら、尾行を警戒して工事現場の中を突っ切ったのがまずかった。地下駐車場か何かのための空間を掘っていたのだろう、大きな穴の上に足場が組んであるだけの不安定な場所に踏み込んでしまったのだ。

いきなり足下がぐらりと傾いだと思ったら、奇妙な浮遊感があつて

次の瞬間には、いきなり足が床についてずつこけそうになつた。

ほらアレよ、ぼーっと階段を降りていて、てっきりもう一段ある

と思つて足を降ろしたらもう床だつたつていう、あの時みたいな感じ。
じ。

おかしいな、もつと落ちそつた感じだったのに。

そこは天井のめちゃくちゃ高いガラス張りの建物の中で、私は薄暗い中、ぼんやりとピンク色に光る不思議な文様の描かれた円の上に立つていた。

目の前には四人の人間がいて、そのうち三人は私を見た瞬間、一歩下がつて恭しく頭を垂れた。

何だか全員、服装がおかしい。テーマパークの従業員みたい。

そして一人残つた、一番立派な身なりだけど無表情な男が、ハツと我に返つたようにこう言つたのだ。

「あー……なんだつたかな」

おい。

「ごほん……異世界からの花嫁よ、よくぞ我がハ

「悪いけど、急いでるから簡潔に。あなた誰」

「……余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス。そなたは余の花嫁となるべく、今この場に呼び寄せら

「話、長くなりそうね。聞いてあげるから、ちょっと匿つてくれない? こんな広々とした場所じゃまずいんだわ、私

私はハラハラしながらあたりを見回した。建物がガラス張りじや丸見えじやないの、あいつ追いかけて来てないでしょうね。

そう、私はまだ自分が工事現場付近にいると思っていたのだ。暗いし建物あるし空が見えてるし。

フェザなんとかという男は、女がうらやましがりそうな大きな瞳を瞬かせた。いまいち頼りにはならなさそうだけど、いい男の部類

には違いない。

「追われてあるのか」

そう聞かれ、犯罪者だと思われたくないで、私は当たらずといえども遠からずな理由を付けた。

「変な男につきまとわれててね」

「それなら、心配ない。そやつは追って来れぬ」

彼は、カツラなのか何なのか、白銀の髪をさらりと揺らして口の端を少し上げた。

「そなたは、別の世界に逃亡したのだからな」

正直、変なのに関わっちゃったな、と思つた。

思い出に浸りながら機械的にオールを漕いでいると、やがて朝陽が昇つて朝もやが晴れ、前方の川べりに町が見えた。

さて、これからどうしよう。フェザリオン フェザーは今、新しくできた港の開港式典に出るために海沿いの町に出張していて、今日城に戻るはずだ。帰つてくるところをどこかでどうにか捕まえて、一緒に戻れば……。

「うん、悪いけどフェザーはあてにならない。実質、お城で一番偉いのは王太后様（つまり先代王妃ね）で、王様であるうちの夫ではないっていうあたりがすでに情けない。」

そういえば、祭司長のグレッドは王太后様のお気に入りなのよね

……思い出したらまたムカついてきたので、それは置いといて。

いくら王妃だとはいえ、私の立場なんか部屋の隅のホコリみたいなものだ。何で日本に強制送還されることになったのかわからないことは、城に戻つてもまたそのうち今回のよつに掃いて捨てられるだけだろう。今回のこと訴えてもグレッドはびくせしらを切る

だろうし、また産後ウツだなんだって言われて病氣扱いされたら
まったくもんじやない。

生まれたばかりの可愛い息子、ワインガリオンを思い浮かべる。
フュザーにそつくりだと思うんだけど、フュザーは田つきが私に
そつくりだと言っていた。時々睨まれるって。

息子に会えないのは辛いけど、王太后様が優秀な乳母をつけてく
れだし、再会の時まであの子が大事にしてもらえるのは間違いない
だろう。

親子の明るい未来のためにも、今は雌伏の時。まずは今後の対策
を練らないとなき不得、私一人では心許ない。

こんな時に、たった二年前に異世界からやつてきた私に、頼れる
人なんかいるわけがないよ……。

……なーんて。いないこともないんだな！ これがな！

4 名誉の負傷

季節の変わり田になると、左の膝が痛む。

いつもの飲み屋の、いつもの席にどっかりと座り込み、俺は膝を伸ばしてさすりながらいつも酒を注文した。

狭い店内の喧騒と人いきれの中、酔いが回つてくると脳裏に浮かぶのは、かつて仕えていた主 ハーヴェステス国王妃、麗しきシーザ様の黒い瞳。

怪我で退役した今でも、お守りしたいと願うのはシーザ様ただ一人だ。

異世界から女性が召喚されたという発表があつた翌日、俺はその女性専属の警護職に着くことになった。

たぶん、俺がそれほど職務に熱心でないから、選ばれたのだろう。異世界人の女性は、世継ぎを生む大事な身体ではある。しかし、彼女はこの世界に降つてわいた、良い意味でも悪い意味でも唯一の存在。その身にさまざまな職務や因縁を背負つ王太后や国王とは、警護の意味合いが違う。そういうことだ。

女性はまだ婚儀を上げていないので、王妃ではなく仮に「栄妃」と呼ばれている。国を栄えさせる存在という意味だろう。本来の名ももちろんあるのだろうが、何故なのか本人が言いたがらないと聞いた。

その栄妃の真新しい居間に、着任のあいさつに赴いた。黒髪黒目の栄妃は俺を見ると、新芽のような淡い緑のドレスの裾を気にしながら立ち上がった。着慣れないのだろう。

「御身をお守りさせていただく栄誉を賜りました、メイラー・セリ

クスと申します」

型通りの言葉を述べて膝をつき、騎士の礼を取つて、王妃の手を額に戴く。ひんやりとした細い指。

反応がないので、そのままの姿勢で戸惑つていると、横から女官長が声をかけた。

「栄妃様。栄妃様？……固まっておいでだわ。栄妃様！」

それを聞いてうつかり顔を上げると、栄妃は頬を夜明けの雲のように薄紅色に染め、口をパクパクさせていた。

そして言つた。

「王様や祭司長の上から目線より、ひざまづく騎士の下から目線つて、破壊力デカつ！」

瞬間、周りの景色が消えて、彼女だけしか見えなくなつた。異世界に召喚されて堂々としているのに、このような小さなことで恥じらつてている。強く、そして纖細な、この女性。騎士になつて初めて、『心からの忠誠』という言葉の意味を知つたその日から、俺は仕事にも訓練にも精を出すようになつた。

彼女はとにかく色々と規格外な言動の女性なのだが、昨日のことのように思い出せる印象的な出来事が一つある。

婚儀も間近に迫つたその日は、王城に宝石商がやってきていた。栄妃は国王とともに商人に会い、卓の黒い布の上に広げられた宝石類を眺めている。自ら、「自分の身を飾るものは自分で選びたい」とおつしやつたのだ。

普段あまり贅沢なことを好まれない妃なので、宝石を見たいとおつしやつた時は意外だった。今も、それほど日の前の輝きに熱中しているようには見えないのだが……。

「気に入ったものはあつたか」

国王が隣の栄妃に声をかけ、商人が上品な微笑みを浮かべて、一

つの箱を差し出した。

「こちらはいかがでしょう。隣国から取り寄せた、大変珍しい一点ものの首飾りでござります。女性の頂点に立たれる方でいらっしゃる栄妃様に、ふさわしいかと存じます」

俺もちらりと目を走らせた。

あの馬鹿馬鹿しいほどでかいのが宝石か。ふん、芋か卵の間違いじゃないのか。

しかし彼女は、その首飾りに関しては何も言わず、ちよつと首をかしげてこう尋ねた。

「あなたはこの後、城の他の女性たち向けにも商いをするんでしょう？」

かつぶくのいい商人は、目を瞬かせた。

「はい。午後に、応接室の一室をお借りして、店を開かせていただくなっています」

「侍女や女官や、街の女性たちは、どんな宝飾品をつけるの？ 良かつたら、見せてもらえないかしら」

なぜそのようなことを尋ねるのか、その場の人間はみな思ったことだろうが、商人は快く傍らの箱を引き寄せて卓の上に載せた。開くと、細い銀の鎖に小さな宝石が三つ、等間隔で揺れている首飾りがいくつか入っていた。

「こちらはかなり以前から、街の女性に人気ですね。この国で多く産出される石ですので、本物でありながら値段もそう張りません」

「ふーん……なら私、これが欲しいな」

国王と商人が、同時に栄妃を見る。俺もつい、そちらへ目を走らせた。洒落た首飾りではあるが、とても彼女の胸元を飾るにふさわしいとは思えない。

栄妃は、星の瞬く夜空のような瞳で国王を見つめながら、ふと眼を伏せた。

「さつきの一点物も素敵だつたけど、何だか寂しくて」

「寂しい？」

「私は異世界から来た人間……皆さんは優しく私を受け入れてくれたけど、黒髪黒目の中は一人だけ。そんな私が、一つしかない宝飾品をつけても、寂しさが増すだけのような気がして……。できれば、この国の大勢の女性たちと同じものを身につけて、少しでもこの国の一員になつたような気持ちを味わえたらな、つて」

俺はぐつと下唇を噛んだ。

なんと……なんと健気なお方なのだ！

商人も思わず目を潤ませている。

「栄妃様……そのようなお気持ちでいらしたとは」「けれど恐れながら、やはりお呪しものとの兼ね合いもありますし」

侍女が口を挟む。もつともな意見かもしれないが、少しは空氣を読め。

国王がわざかに栄妃の方に身体の向きを変えながら、商人に言った。

「それで寂しさが和らぐのなら、余は妃の意見を尊重してやりたいと思うが……その方の意見はどうか」

「は」

商人は少し考え、

「それでは、お望みのこの首飾りを、いくつか重ねてつけた形に見えるものをお造りるのはいかがでしょうか。それなら、国の女性たちと同じものをつけられるのと同時に、お呪しものと比較しても見劣りしないものを」用意できると存じます」

栄妃は嬉しそうに、国王と商人の顔を見比べた。

「そうしてもらえた嬉しいな」

「なら、そうするがよい」

「ありがとう…」

この逸話はたちまち知れ渡り、男性からは同情を、女性からは親近感を呼んだ。さらに国王との仲睦まじさも表す結果となり、栄妃の人気はいやがおうにも高まつたのだ。

そんな女性をお守りできることが、俺は誇らしくてならなかつた。しかしまさかこんなにも早く、俺がその役目を手放さなくてはならない日が来るとは……。

あれは、婚儀が行われて栄妃が名実ともに「王妃」となり、その御身にお子を宿して体調が安定した、そんな頃。

城下町の劇場での観劇にお供したとき、異世界から召喚された者を悪魔だと狂信的に信じ込んだ男が、給仕を装い貴賓席に侵入した。俺は、王妃に刃物で襲いかかった男ともみ合いになつた末、男とともに貴賓席から階下の客席へ転落。王妃の悲鳴が意識の彼方へ遠のく中、足のすさまじい痛みとともに気絶した。

その時以来、俺は左足を少し引きずつて歩かなくてはならなくなつた。膝の痛みは、その時に王妃を守つたといつ誇らしき勲章。しかし、後遺症が残つた足では、主を万全の状態でお守りすることはできない。俺は断腸の思いで、故郷へ帰つて予備役につくことを受け入れた。

5 女王じゃなくて王妃だから

役目を退く報告で王妃の居間を訪れたとき、王妃は俺の手を取りて泣いて下さった。その涙は、どんな宝石よりも、どんな星よりも、美しく俺の心に残った。

「いつか、あなたの故郷に遊びに、じゃなかつた、視察か何かで行ってみたい。その時はきっと会いましょうね」

泣き笑いの顔の王妃に、俺は涙をこらえて頭を垂れた。

「この足がきっかけで王妃様をお招きできるなら、故郷の者は皆、私の負傷を名誉に思うことでしょう。その時は、この足でもお役に立てるところをお見せしとおげざいます」

「ええ。あなたは私の一番の騎士だもの、きっとまた私を助けてくれるわね」

顔を上げたとき、俺は確かに後光を見た。

王妃は、俺の女神。

その時の言葉を励みに、故郷の警備隊の顧問のよつな仕事をして日々を送った。足は朝晩や疲れた時に痛むくらいで、杖も必要ない程度の症状だったから、この程度の仕事など軽くこなせると思っていた。

しかし、かつての仕事との大小の差が日につき、喪失感が心の奥にどんどん重く居座るようになり。

いつしか、酒の量が増えていた。不良騎士に逆戻りか……。

閉店時間になつて仕方なく店を出ると、ゆっくり歩いて自宅に向かう。石畳の道はすでに暗闇に沈み、人通りもほとんどない。

この街は俺の故郷だが、俺は実家には戻らず、職場に近い平屋の

一戸建てに住んでいた。扉の鍵を回して開けたところ、後ろから鈴の鳴るような声で話しかけられた。

「メイラー？」

振り向くと、若い女が立っていた。頭にかぶつた手巾の下から、白い髪のお下げが胸元に垂れている。瞳は暗くてよく見えないが、かなり濃い色。

そしてその顔は、俺の心の女神にそっくりだった。

「シーザさま……」

俺はややられつの回らない声でつぶやくと、そっと女の手を取つた。女はされるがままで、にこりと微笑んで言った。

「中に入れてくれる？」

その時の俺は、感情を取り違えていたとしか言いようがない。

敬愛する王妃。彼女のそばにいたいという、狂おしいほどの気持ち。そんな彼女にそっくりの女が、家に入れてくれと言つ。

俺は女の手を引くと、抱き寄せながら家の中に引っ張り込んだ。

「うわ、あれ？ ま、待ちなさいよコラ」「唇を奪おうとする俺は、女は顔を振つて避け、つこでにべしつと俺の額を叩いた。

「私はこういう展開もアリだけど、そっち的になります」「んじやないの」「レ。私はあなたの主人でしうが」

「いいね、そういう女王様系の設定……あんた俺の好みだな」「さわやきながら、壁に押しつける。首筋を吸いながら、手を性急に動かして服の隙間から素肌を探す。

「ちょ……ま、まあ、女王様プレイ好きなら私なんかおあつらえ向きかもね……って、女王と王妃って何か違わない？」

「細かいことはいいだろ？」

もつれるように敷物の上に倒れ込む。その拍子に、白いものが跳ねとんだ。

敷物の上に落ちたのは、女が頭にかぶっていた手巾と、それにくつついた白い三つ編み……つけ毛？

そして布の下から現れたのは、つややかな黒髪だった。

俺は彼女の上から反射的にびすさると、壁際まで下がつて平伏した。

「申つし訳」ございませんっ！……いかよにも御処分を！」

王妃は肘をついて上半身を起こし　なぜ王妃がここにいる？

俺を見て肩をすくめた。

「もう終わり？　ちえー、ちょっとときめいやったのに」

「その気！？」

「なんかいい雰囲気だつたから、こうなつたらイタシカタないっていうか、イタすしかないっていつか

「なりません王妃様！」

「声が大きいよつ。シーゼつて呼んでいいからー。」

「そ、そんな、恐れ多い……！」

「気に入つて名前だから、そつちで呼んでよ。フュザーにこの名前もらった時は、シーツとガーゼ足したみたいな変な名前だなあと思つたけど、今は愛着わいてるのよね」

「へ、陛下……」存知でしたかこの感想。

イルフレートが伝えてきた意味を受け、俺の脳裏で白い布がヒラヒラとはためいた。

「と言つわけで、私は城から逃亡せざるを得なかつたつてわけ」

簡素な机でパンとチーズを喜んで召し上がっているシーザ様に、俺は質問させていただく。

「王ひ……シーザ様、ここまでどうやっておこでになつたのです」

王城からここまでは、移動し続けて一日半はかかる。

「小舟と、貸し馬。あ、地図はだいたい頭に入つてる」

「代金は？」

「少しは持つてたし、足りなくなつたらこれがあるし」

シーザ様は肩掛け鞄を引き寄せる、中から首飾りを取り出した。あの、俺が彼女を守りたいと強烈に思つかけとなつた首飾りだ。しかし、石が一つ二つなくなつてゐる。

シーザ様は口の中のものを飲み込んで、機嫌良く言つた。

「一点物より、庶民的なものの方が換金しやすいと思つたんだけど、正解だつたわ。足つかないしね」

俺の中で何かが、ガラガラと音を立てて崩れ落ちて行つた。

「…………し、しかし、まさかグレッド様がそんな」

「私はあつたことをそのまま言つただけよ」「よ

重くため息をつくシーザ様に、俺はあわてて言つ。

「いえ、疑つたわけでは。驚いただけです。とにかくそういうふうに

でしたら、むさ苦しい」ところですがひとまずこの家にじっと滞在下さい。数日中に、もつとくつろげる場所をご用意いたしましたので。後のことはおいおい

すると、シーザ様は弱弱しく微笑んだ。

「ありがとう……良かつた、メイラーが城の外にいてくれて」

ついさつと崩れたものが急速に修復され、俺は舞い上がった。

シーザ様が、俺を頼りにして下さつてゐる！

表情筋がニヤニヤ笑いの形に反応するのを必死に押さえ込んでピクピクさせながら、俺はシーザ様の椅子のそばで左膝をついて（ちよつと痛い）頭を垂れた。

「もつたいなきお言葉。しかし、この足でお役に立てますかどうか

「必要なのは兵力じゃないから……」

その言葉に、思わず田頭が熱くなる。こんな俺でも、シーザ様のお役に立てることがあるらしい。

俺はパッと顔を上げてそのお手を取ろうとして……動きを止めた。

シーザ様は、机に突っ伏しておやすみになっていた。

あ、弱弱しく見えたのは眠かったからか……って、え？　俺の目の前で？　安心？　無防備？　って主を机で眠らせるとかどうなんだ？　俺の寝台へ？　ややや役得っ……！？

俺は細心の注意を払ってシーザ様を抱き上げた。ひ、膝に来る……が、俺の胸元に顔が寄せられて長いまつげが……柔らかくて良い香りが……。

そつと寝台に降ろすと毛布をかけ、俺は家の外に飛び出すると、街の共用井戸で冷たい水を汲んで頭にぶっかけたのだった。

5 女王じゃなくて王妃だから（後書き）

明日は王城から中継で、国王陛下に結婚前後の思い出を語つて頂く予定です。それでは今夜はこの辺で。

6 長き黒髪の花嫁（前書き）

お気に入り登録1111件突破ありがとうございます！

6 長き黒髪の花嫁

シーゼが『帰った』と聞かされた、その日の夜。

余はたつた一人、寝台に起き上がりて足を降ろしたまま窓から外を眺めていた。眠れなかつたのだ。

この寝台は、こんなに広かつただろうか。結婚して以来、ここにシーゼがいなかつた夜などほとんどないからな……。

思えば、シーゼは最初からそういうことに積極的だつた。王妃になるのを承諾したと思つたら、もうその口に

「じゃ、今夜フェザーの部屋に行くわ」

と言い出して、侍女たちの度肝を抜いた。

寝室を共にするのは結婚式を挙げてからでよい、と言つて、「えー、だつて世継ぎを生むために呼ばれたんだから、式なんか待つてないでさつさと仕込みを開始してもいいじゃない」と言い放つて、侍女たちの魂も抜いた。

こちらの世界の貞操観念も考えてくれ、と言つたら

「こりゃ失礼」

とようやく引き下がつてくれたが 何を焦つているのか。

そしてそれがきっかけだつたのか、彼女はこちらの世界のことを学んでこちらの人間らしく、そして王妃らしく振る舞うことを中心始めた。

と言つても、彼女がやらなくてはならないことはそう多くない。こいつては何だが、異世界からの王妃は世継ぎ以外の役割は大して期待されていないのが実情だ。彼女もそれは、王妃教育の中で徐々に感じ取つていつたらしい。

「えーと、フェザーには悪いんだけど、このお城で一番偉いのって、王太后様なの？」

午後のお茶の時間に一人きりになつた時、聞きにくい（はずの）ことをスパツと聞いて来た。

まあ、事実なので隠すこともない。余は説明した。

「王太后のレイザ様は、先代の父王とともにこの国の発展に偉大な貢献をなさつた人物だ。夫婦と言つより、戦友だった。余よりも明らかに格が上だ」

「ふーん。……フェザーは何だか、王様業がつまらなさそつね。嫌なの？」

「嫌ではないが、他に適した人間が身近にいるわけだからな。余でなくともいいのだ、という思いはある。国王失格かな」

苦笑すると、彼女はまたもやスパツと言つた。

「失格なんて思うことないよ、王家に生まれたのはフェザーが選んだわけじゃないんだから。あなたは何も悪くないでしょ」

「いや……」この国では、子どもは親を選んで生まれてくると言われておるのだ

そう言つと、彼女は少し顔をしかめた。

「そうなの？」

「そうだ。だから、この場所に生まれた意味を見つけなくては、と両親からよく言われたものだ」

余は、故人である父王と実の母である第一側妃を想い浮かべた。厳しかつたが、優しい両親だった。

彼女は少し沈黙してから、こう言つた。

「ふうん……。いいわね、親にそつやつて励ましてもらえたら。私の生まれにも意味があるのかな？ あんな両親の間に生まれた意味が？」

「…………」

余はこの時にはもう、彼女が著名な両親の元に生まれた隠し子で

あることだけは聞いていたが、詳しいことは聞きかねていた。どれだけ不自由な暮らしを強いられていたのか。

しかし彼女は、旺盛な食欲で菓菓子をつまみながら、さらりと言つた。

「まあ少なくとも私は、あなたがこの国の王様で良かつたわよ」

初めて出会つたころよりも、ずいぶん表情が柔らかくなつた彼女を見て、余は思った。

彼女が余との結婚を喜んで今ここで微笑んでいる、そのことが両親がきつかけだと言つなら、彼らに感謝してもいいのかもしない、と。

召喚から一ヶ月後、結婚式と王妃のお披露目は滞りなく行われた。王城の謁見の間で、余の手から妃の頭に華奢な王妃冠を載せる。顔を上げた妃の手を引いて壇上に促すと、妃はすらりと余の隣に立つて祝福する人々の方を向いてみせた。

もともと整つた顔をしているとは思つていたが、化粧をした妃は歴代の王妃に引けを取らぬほど美しかつた。初めはドレスの着こなしにも苦労していたようなのに、今ではすっかり堂に入つたものだ。身についた、というよりも、それらしく見せる演技が上手いのだ。

白地に金糸の刺繡の入つたドレスは腰の切り替えがなく、彼女の身体に沿つていて、女性らしい腰の線を際立たせながら足元に向けて広がつている。

そして黒髪はわざと目立つように、耳のあたりに少し生花とイルフレートをつけているだけで、後は背中に流れ落ちるままにしてあつた。異世界人の象徴である色を目立たせるための、祭司長の指示だ。その髪も、侍女たちの苦労の賜物か、美しく艶やかに光つている。

髪を見つめていたのに気づいたのか、彼女は拍手を送つて来る人

々の方を向いて微笑んだまま、余だけに聞こえるように言った。

「髪を伸ばしてたのが、こんなところで重要なとは思つてなかつたわ、さすがに」

「何か意味があつて、伸ばしていたのか？」

余も人々の方を向いたまま尋ねると、彼女は答えた。

「うん。 いざ逃げるつて時にバッサリ切れば、印象が変わつて見つかりにくいと思つて」

また逃亡の話か、と余が苦笑したのに気づいて、彼女は言った。
「ああごめん、ただ、いつでも逃げられる状態にしておかないと落ち着かないからそうしてただけ。 身に沁みついちゃつてね。もう逃げたりしないよ」

「そう願いたいものだな」

まさか新郎新婦がこんな会話を交わしているなどとは、誰も思わないであろう。

余は内心ため息をつきながら、彼女と腕を組んで大広間へと移動した。

7 後朝の贈り物（前書き）

お気に入り登録1234件突破、総合評価3333ポイント突破ありがとうございます！（作品にちなんで数字にこだわってみた（笑））

祝宴が始まると、招待客が次々と我々夫婦の元にあいさつに訪れた。しかし、若い女たちは明らかに妃を踏みしておらず、余に自分を印象付けておこうという言動が鼻につく。もし余と妃が不仲になつたら側妃に……ということだろうか。

妃はわかつてゐるのかないのか、終始微笑みを絶やさなかつた。たくましい女だ。

その夜、夫婦の寝室となつた部屋で、王妃となつた彼女は寝台に腰かけて余を待つていた。

彼女はごく普通の夜着姿で、少々警戒していた余は内心胸をなでおろす。こちらは未だに、妃との距離感を測りかねていたからだ。しかし彼女は上目遣いで一言、

「『疲れただろうから今日は休め』とか言わないよね……？」

と先手を打つてきた。

む……強引に迫つて来られるよりも、この迫り方は逆に惹きつけられるような……。

「そやは言わないが……全身全霊で取り組まなくとも、子どもはできる時はできる、そういうものではないのか？ 何をそんなに急いでおるのだ」

彼女の隣に腰かけながら、気になつていてることを聞いてみると、妃は言った。

「だつて、心配なの。本当に子どもができるかどうか

ああ、そいか……と余は彼女の気持ちを想像した。

子どもができなければ自分の居場所がなくなる、やつ思つてゐるのだろうか？

しかし彼女は、心配そうにこゝへ続けた。

「海外旅行に行くと、日本の電化製品が電圧の違いで使えなかつたりするんだって。異世界人同士の私とあなただって、そういうアレで妊娠しにくいとかあるかもしけないでしょ、変圧器があるわけじゃないんだしさ。うわ、プラグ突っ込んだとたんに故障して使いものにならなくなつたらどうしよう」

「ふらぐ、つっこむ？」

イルフレートが伝えたあいまいな意味を、余はかろうじて咀嚼し飲み込んだ。ある意味、本当に妃を理解しようと思ったら、イルフレートでは追いつかぬ。

「…………そなたの考え方方が独特なのはよくわかつた。しかし、過去に召喚された王妃はみな、無事に子を授かつてゐる」

「ならないけど」

さらりと答えた彼女は、少し沈黙した後で言った。

「ねえ……例えば王妃が、この城から逃げ出さなきゃならなにようなことつて、あるのかな？」

余は一瞬、言葉を失つた。

逃げる可能性を考えることが身にしみついていると言つていたが、彼女は結婚式を挙げた今も、余や周りの人間、それに現在の生活自体を信じていないのだ。召喚されたばかりの頃の、人間より城を先に信じた彼女を思い出す。

お互の必要性があつての結婚だが、余と彼女は心の中に、人間を信じられないという似た部分を持つてているのだ。

そんな男女が身を寄せ合つ 意外と、似合いの夫婦なのかもしれぬ。

「…………そのような不吉なことを申すな」

余は苦笑しながら、彼女の髪を軽く撫でた。早く彼女には安心してほしい、と思つた。

「不吉?」

「王妃が逃げるのは、他国から攻められてこの城が陥りうるであろう?」

妃は肩をすくめた。

「それもそうか」

わざかな沈黙。

余の瞳をじっと見つめていた妃が、唇を寄せて來た。軽く触れ合う。

妃はいつたん顔を離して、微笑んだ。

「こっちって、結婚式に誓いのキスはしないのね。何だか、やつと ! つて感じ……」

それからもう一度、今度は深く。さうして一度。腕を回すと、女性らしい曲線を持つた身体がだんだん熱を帯びて、余の体温と同じであつて行くのがわかる。

「そなたの名前は、結局教えてはくれぬのか」

耳元でささやくと、

「隠すつもりはないんだけどね。本当は、シズコって書いつの」

彼女も耳元でささやき返してきた。

「でも私、向こうでも本当の名前は名乗らないで、自分で勝手につけた名前を使ってたんだ。時々えたりもしてたし。今はもうあなたが私の夫なんだし、こひれでの名前はあなたがつけてくれない?」

妃に、余が名前を……。

二人の距離が、一気に縮まつた気がした。直接肌と肌を触れ合わせながら寝台に横たわると、先ほど妃の言つた「やつと」という感

覚が、余の中にもようやく湧きあがってきた。

「……そなたをもう少し知つてから、名前を考えることじよひ」

言つと、妃は濡れた瞳でこちらを見上げてくすくすと笑つた。

「じゃあ、私をじっくり教えてあげなくちゃね」

翌朝、余は妃に「シーザ」という名前を贈つた。「シズコ」という発音から思いついたのだ。

「『シーザ』……？」

妃はかなりいぶかしげな表情をしている。ああ、きっと、イルフレートが翻訳できなかつたのだろう。

「古い言葉で『家』とか『居場所』という意味だ。そなたはここで居場所を得たのだから、と思ってな」

説明してやると、彼女は驚いた顔になつた。

「……今まで、いい人にも何人か会えて、私が見つかりそうになると『早く逃げる』って助けてくれたの。でも、『ここがお前の居場所だ』って言ってもらつたのは、初めてだわ」

そして、余の首に手を回して抱きついて来た。

「ありがとう、嬉しい……んつ」

「ん。い、いや、さすがにそろそろ寝室を出なくては」「だーもーつ、ここには盛り上がるところでしょうがー…?」

そうだ。居場所を得て、喜んでいたではないか。それなのに、『

帰つた』……?

余は腕を組んで考え込んだ。そして、小さな疑問点に行き当つたつた。

彼女が帰るために必要だつた、帰還の陣。それを、祭司長はどのようにして開いたのだろうか。

魔方陣を開くには、相当量の魔力が必要なはずだが、現在それを用意することは可能だったのか……？

7 後朝の贈り物（後書き）

次話はこの世界の魔法について。王妃視点なのでざつくりいい加減にいつもの調子で語られると思います。

私は、夢を見ていた。

お城で生活をし始めてしばらく経つて、フューザーと結婚して、ようやく私にもこれは現実なんだということがじわじわと実感できてきた、そんな頃の夢だ。

ある日、私はフューザーとの夕食の真っ最中に、いきなりフォーカを取り落として叫んでしまった。

「魔法！？」

「ぐほつ……ぐつした、急に」

むせるフューザーに、私は椅子から腰を浮かして言った。

「いや、今さらで悪いんだけど、異世界から人間を召喚できるってことは魔法があるってこと！？」

普段の生活には魔法の気配が全然ないもんだから、すっかり忘れてたよ！

「本当に今さらだな……一応、魔法はある」

フューザーは口元を拭きながらつづなずいた。そのテンションの低さにこいつも少し興奮をおさめながら、聞き返す。

「なに、『一応』って」

「建国時は魔法大国の名をほしにまことにしていたが、長の年月の間に血が薄れたのか、ほかの要因があるのか、とにかく現在では魔法は弱体化しているのだ」

「でも、召喚なんですか」ことができてるじゃないの。それにイルフレートだって

いろいろ聞いてみたところ、今ではこの世界の魔法っていうのは、例えて言うなら「スプーンなんて手で曲げられるじゃん」みたいなレベルなんだそうだ。ちょっとがっかり。

そして召喚魔法は、例えて言つなら「虫眼鏡で日光集めてまで目玉焼き作らなくても」みたいな、時間も手間もかかるかなり無理矢理感のあるシロモノなんだそうだ。

「九十九代目の国王妃を召喚した翌年に、もう百代目の国王妃を召喚しなくてはならなかつた時など、過労で倒れる魔法官が続出したと聞く……」

「痛ましげにつぶやくフェザーに、

「だからキリ番とかゾロ目にこだわるのやめよつよ

つつこむ私。まあ、じゃなきゃ、百一十三代つていう“連番国王妃”の私は召喚してもらえなかつたわけだけど。

「とにかく、魔法官っていう職業の人人がいるのね？」

「ああ。魔法の研究と保存、それに召喚などの技のため、魔力の蓄積などを行つている者たちだ」

「面白そう、会つてみたい！」

「というわけでその翌日、私は魔法庁と呼ばれる場所に遊びに、じやなかつた、視察に行つた。

研究所みたいな場所なのかと思つてたら、意外にもそこはガラス張りの温室だつた。私が召喚された時に出現した聖堂、あれもガラス張りだつたな、と思つていたら、大理石でできた大聖堂を挟んで東側に召喚された時の聖堂（小聖堂）、西側に魔法庁、というつくりになつていて、それらの建物は続きになつていたのだ。ていうか、私がガラスガラス言つてるけど、本当は水晶みたいな貴重な石らしい。さーせん。

魔法庁の水晶の建物は、中央に天井を突き抜けて大きな木がそびえ立つていて、その木の根元に置かれた一枚板の大きなテーブルで、何人かの魔法官が仕事をしていた。書類仕事をする人もいれば、理科の実験みたいにフラスコみたいなものを作れこれしている人もいる。私はそこを、魔法庁の長官に案内してもらつた。

長官は、少しクリーム色がかつた長い白髪をアップにした、四交代前半くらいの女性。政治家みたいにきりりとした雰囲気で、私は一瞬テレビで見た自分の父親を連想して、ちょっとびり苦手意識を持つてしまつた。いかんいかん。

「魔法の力は自然界から少しづつ生まれていて、それを世界中からこの場所に集めています。この建物は、力を吸収しやすいように考えられて作られているのです」

長官は、魔法のない世界からきた私にもわかるようにかみ砕いて説明してくれた。そして、

「ここが、魔力を蓄えておく場所です」

と見せてくれたのが、建物中央にそびえる木の洞^{うる}だつた。洞の中には、ぱつと見て砂時計の形をしたガラス（あ、水晶か）の大きな入れ物がはまりこんでいて、その中で何かがキラキラ漂いながら光っている。

「ここに溜まつた力を使って、召喚は行われたのですよ」

「へえ……何だか綺麗。イルフレートも、この力を使って作られたんですか？」

私の髪に、髪飾りの一部のよつにしてとまつてあるイルフレートを指さして聞くと、長官は赤紫色の瞳を細めながら答えてくれた。

「あれは少し違います。遺跡などから、古代の強い魔法が保存された状態で発見されることがあるのです。それと現在の技術を結びつけて、イルフレートなどの魔精靈を作り出しています」

「へええー。じゃあ、イルフレートってずいぶん希少な存在なんですか？」

すね

私は感心してお礼を言った。

「私のために使わせてくれて、ありがとうございます」

すると長官は、艶のあるほほえみを浮かべて言った。

「そんな、恐れ多い。王妃様を召喚する際は、予定していたより少ない魔力で召喚することができましたので、私どもこそお礼申し上げます」

「そうなんですか？」

「こちらから引く力に、抵抗感があまりなかつたと……むしろこちらに来ようとする力を感じたと、祭司長が

ハハハハハ。笑つとけ。

私はいきなり覚醒すると、寝台の上に起き上がった。

一瞬自分がどこにいるのかわからなかつたけど、朝陽の差し込む殺風景な木造の部屋を見てすぐに思い出した。そう、退役した近衛騎士のメイラーの家にいるんだった。

もう一度、長官に説明してもらつたことを思い出しながら考える。私を召喚するために、まあ少なく済んだとはいへかなりの量の魔力を使ったわけよね。それなのに、残りの魔力で帰還の陣も開くことができたの？ 帰りたがつていない私を無理矢理帰すには、それくらいじゃ無理なんじゃ？ やっぱりあれは、帰還の陣じゃなかつたんじやなかろうか。

いやいや、でも召喚から一年経つてゐるんだから、それなりの魔力は溜まつてゐる……？

ダメだ、私は専門家じゃないからわからない。

「お田代ですか、シーザ様。ゆっくりお休みになれましたか」

気がついたら、メイラーが寝台のそばで膝をついていた。壁際の床に毛布が一枚置いてある……あそこで寝てくれたのかな。でも今はすでに動ける準備万端という感じで、さすがは元騎士だと思つ。

「おはよう、メイラー」

私は寝台から足を降ろして、彼に向かい合つてから尋ねた。

「ねえ、あなたはまだ私の騎士？」

「もちろんです。この忠誠、揺らいだことなどございません」

「良かつた。それじゃ、会いに行きたい人ができたから、付き合つて欲しいんだけど

「は？」

魔法にある程度詳しい人で、今会いに行ける人といったら、一人しか思いつかない。

私は枕元に置いてあつた、白いつけ毛を手にとつて言った。

「これをくれた人。この髪の、元の持ち主に会いに行きたいの」

メイラーは言った。

「人毛！？」

あ、なんか今ちょっと引かれたかも。

9 魔法官の見習い

ハーヴェステス王国に召喚されてから、乗馬の練習はかなりまじめにやつたので、妊娠するまでの数ヶ月でかなり乗りこなせるようになつた。だつてやつぱりこちらの主な移動手段だからね、何かあつた時に必要になるでしょ……って本当にそつちゅうて残念だけ。

私はメイラーと纏くわいを並べて、馬を駆け足で走らせていた。このスピードならどうにか話ができる。街から街へと向かう道はレンガが敷かれて整備されていて、馬車がすれ違える程度の広さもあり走りやすかつた。

「このつけ毛は、アコルの髪で作ったの。アコルって覚えてる？」
つけ毛つきの手巾をかぶつた私が聞くと、メイラーはやや長めの髪をなびかせながら　　彼の髪はほんのりオレンジ色がかつた白だ
返事をした。

「覚えてます、有名でしたから。魔法庁で働いていた、魔法官見習いの少年ですよね」

「あ、やっぱり有名だったんだ、あの子」

私がメイラーに視線をやると、彼は何とも言えない表情をした。

「俺が言つのも何ですが、綺麗な少年でしたからね。侍女たちの噂の的でした」

「私も初めて会つた時は、女の子と間違えたんだ」
私はその時のこと思い出した。

私が魔法に興味を示したので、魔法庁の長官が何日かに一度、王妃教育の一環でちょっとした講義をしてくれることになった。でも

さすがに長官さんだけあって基本的に忙しい人で、突然的な仕事で遅れることもあるし、来られないこともある。

それで長官が気を遣つてくれて、

「私より話しやすいこともありますでしょ」「
と、そういう時の話しあ相手に助手をよこして貰うことになった。
魔法官見習いとして修業中の子なんだって。」

十一、三歳くらいのその助手の子に初めて会つたとき、私はびっくりして声をかけるのも忘れてしまつた。だつて、まるで宗教画に出でくる天使みたいに綺麗な子なんだもん！

こちらの人はみんな白っぽい色の髪をしてゐるけど、その子はほのかに青みがかつた白。綺麗にウエーブして、お尻の下あたりまで艶やかに流れ落ちてゐる。瞳はアメジストみたいな透き通つた紫で、ぱっちり一重に天然のアイシャドウ。透けそうに白い肌はうつすらとピンクに染まり、ふつくらした唇は珊瑚色。

魔法庁の制服のシンプルな白のローブも似合つてるけど、ぜひともドレスアップしてほし！。あつ、め、メイド服なんかもイ、イイかも、つて息荒くして怪しいわ私。

「あ、ごめん、つい見とれちゃつて。よろしくお願ひしますね」

あわててあいさつすると、その子は本当に天使のように神秘的な微笑みを浮かべ、膝を軽く曲げた。

「アユルと申します。ハーヴの民に繁栄をもたらすお方のお役に立てるなんて、とても光栄です。何でもお申しつけください」

あれ、高いけど意外にもハスキーナ声。地声なのかな？

「もしかして、風邪引いてる？ 無理しないでね」

そう言つてみると、アユルは困つたように微笑んだ。

「お耳汚しで申し訳ありません、声変わりの途中で」

「えつと、きつと言われ過ぎてうんざりかもしれないけど、アユル

「えつと、きつと言われ過ぎてうんざりかもしれないけど、アユル

つて男の子なの？」

「はい」

アコルはやはり慣れているのか、軽くうなずいた。

私はすぐにアコルと仲良くなつた。彼も長官のお許しを得て、ちよくちよく顔を出してくれるようになつた。

アコルとは、長官の講義の時よりもずっとだけた雰囲気で話ができる。テラスでお茶しながらのこともあるし、庭を歩きながらのこともあるつた。

「アコルもそうだけど、魔法庁に勤務してる人たちって、みんな見事な長い髪をしてるよね」

聞いてみると、

「長い髪は、魔力を受け止めやすいんです。それして受け止めた魔力を、魔法官が体内でゅっくつと練つて、魔法庁の聖樹の器に蓄えていくんです」

と説明してくれた。

聖樹の器つて、あの木の洞にはまつてた砂時計みたいなやつか。

「それつて、誰でもできることじやないんじょ」

「あ……素質のあるなしあるみたいです」

控えめに応えるアコルに、私は感心して言つた。

「アコルは有望株つてことね。素質がないと、髪を伸ばしても何も変わらないの？」

「本人が意識できないだけで、力は宿つていると考えられていますね。だから、何か願い事のある人はよく髪を長く伸ばしていますよ、一般の人でも」

「ふーん。それにしても、本当に綺麗な髪」

アコルの髪を褒めると、彼は素直な笑顔を浮かべて言つた。

「王妃様の髪の方が、ずっと綺麗です」

彼はどうやら本気でそう思つてくれていて、少し頬を紅潮させて私の黒髪をじっと見つめている。

そしてストレートに言った。

「あの、触つてもいいですか」

……うーん、それはたぶん、まずいんじゃない？ かつての私なら全然構わないけど、一応今の私は王妃様で、それなりの対応を求める立場なんだよね。あ、ほら、侍女がたしなめるような目でこっちを見る。

「えっと、アユル」

私が言いかけると、彼は自分で気づいたらしかった。ハッとして一步下がり、頭を下げた。

「も、申し訳ありません。僕、すぐ思つてることをしゃべっちゃつて……いつも長官にも注意されているのに」

はは、じゃあいつもこんなこと言つちゃうんだ。そのうち天然の女たらしになつたりして。

「ううん、いいのいいの。あ、そつそつ、他にも聞きたいことがあってね」

私はすぐに話題を変えたのだけれど……。

10 星降る夜の密談（前書き）

裏切つてすみません（まーま）

結婚して三ヶ月ほど経った、ある夜のこと。フュザーが仕事が忙しくてちつとも寝室に姿を見せないので、私は一人で散歩に出かけることにした。寝室にディスプレイされた壺をずりして、その下から続く王族用の逃走経路を通れば、侍女やメイラーたちに気づかれずに聖堂の裏庭に行けるのだ。

裏庭に出ると、空には一面の星屑。けぶるような天の川は少し紫がかって、そのきらめきのほんの一部を地上に降らせている。花弁を閉じて眠る白い花や大理石でできた白い東屋が、幻想的にうっすら紫に染まっていた。

そうだ、私も居間の外の庭で何か育ててみたいな、日本ではそんなことできなかつたけど今ならできるし。

脳内でガーデニング計画を練りながら、東屋まで歩く。フュザーの居間から果実酒をちゅうまかしてきたので、あそこで星見酒としやれこもう。

「……おっと」

「あつ」

「なんと、東屋には先客がいた。

大理石のベンチの上で抱えていた膝を、あわてて降ろして立ち上がったのは、アユルだった。白の上下のパジャマ（？）姿の彼は、白い髪を星明かりに浮かびあがらせて、憂いを帯びた瞳で私を見ている。まるで一枚の絵のようだ。

「アユルじゃないの……どうしたの、こんな夜中に」

「王妃様こそ」

「ですよね」。

「まあここ座つて。アユルも飲む？ つて未成年か」

掲げた果実酒のボトルをあわてて降ろす。こちらはあまり飲酒に

は厳しくないようだけど、一応成年は十六歳だ。

アコルはくすりと笑って、先に座った私の隣に腰を下ろした。そして、ぽつりと言った。

「ちょっと、家にいづらへつて

孤児院出身の彼は、魔法庁の長官夫妻の住む公邸に居候している。捨て子だったので、両親の顔を知らないそうだ。私は「両親の顔を知っている捨て子」だけど、そんな共通点があることもあって、いつも彼のことは気にかけていた。

「何があつたの？ 良かつたら話してみて」

私はアコルの端正な横顔に話しかける。お姉さんに何でも言つてごらん？

「……いいんですか？」

許可を求めてくるところも可愛いな！ 少年の上田遣について凶器だな！

「もちろん」

力強くうなずいて見せると、アコルはちゅうと顔を上げて、ふう、と息をついた。

「長官の御主人が、長期出張先から戻られたんですね、今日」

「ふんふん」

長官の旦那さんは、国境警備を任せている騎士団の団長さん。単身赴任先から戻つて來たのね。

「お留守の間に色々あつたから、なんだか気まずくて」

色々って、何が？

「僕、年上の女の人が好きだし」

「ちょ？」

「長官も寂しかつたんだと思つんですけど」

あれ？

「やっぱり不倫は良くないですよね」

ま？

何だか天使に似つかわしくない単語が出てきた気がするんだけど
つまりこの子つたら長官と！？

「そりや気まずいわ！」

仰天のあまり私は思わずつっこんだ。こっちの髪が白くなりそう
だつつの ！

気つけを一杯やつてから、改めてアコルの話を聞く。

つまりあれよ、私の心配した通りになっちゃってたんだ。私に「
髪に触つてもいいですか」って言つてきた、あの調子で長官に懷い
ちゃつて、ついそんな雰囲気に……つていうね。

「どつ、どうしたいのアコルは……これからも魔法官見習いの修業
は続くんでしょう？」

「そなんんですけど、それも考え方かなって」

アコルは悪びれたところなく言へ。「この子一体、どつちの方向に
天然なの！？」

「僕、どつやら魔力要員としか思われてないみたいなんですよね
「魔力要員？」

「イルフレートとかの魔法を使つた技術を扱つ仕事は、貴族出身の
人たちの仕事。孤児の僕は、魔力を受け止めて器に注ぐだけ。長官
とごひやごひやしたまま、魔力を注ぐだけの仕事をずーっとやって
いくのかと思うと、ちよつとな、つて

この子、意外と上昇志向の持ち主なのかも。

私はアコルの、相変わらず曇りのない瞳を見つめた。

それほど厳しくないとはい、一応『身分』というものが存在す
るこの国で、自分の望んだ職業につける人は一握り。でもこの子は、
自分はこの仕事をずっとやっていくだけでいいのか、つて考へてる
んだ。

アユルは笑つて付け加えた。

「それに、どこかに僕の外見だけじゃなくて中身を見てくれる女の人がいるかもしないですし！」

「ふつ、と噴き出してしまった私を見て、アユルが不思議そうに小首をかしげる。

「あはは、『めんね笑つたりして。泥沼不倫してる割に、恋に前向きでいいなと思つたの。うん、そういう風に色々考へてるなら、私は応援する』

するとアユルは、逆に心配そうに言つた。

「ありがとうございます……でも、王妃様はいかがなんですか？
今ここにいらっしゃるつて、まさか王様と何か」

「ああ、ただベッドで待つてただけっていうのも退屈だから、散歩に来ただけ。だつて最近ほつたらかしなんだもん、私のこと」

私は憤然と言つた。アルコールの勢いもあつたし、アユルはもう男女のアレコレを知つてゐるんだと思つたらつゝ口が滑つてしまつたのよ……だつて深夜テンションでこんな話できる人、他にいないんだもん。

「ありえないでしょ、三日もしてないんだよ新婚なのに。子作りする気あんのかしら」

「…………み、三日くらには許して差し上げて下さい」

「あ、そう？」

「まあ、フエザーも色々と考えてくれてるんだと思う。きっと、あまりガツガツしたら私が可哀想とか思つてるんじゃないかな」

「可哀想？」

「うん。世継ぎを生ませるために私を呪喚した割には、フエザーは私のこと、子を生むだけの存在にしないように気を遣つてくれてるみたい」

アユルは私をじつと見つめて、そしてまた天使の微笑みを浮かべ

た。白くも黒くもない、透明で素直な微笑み。

「素敵ですね。僕もそういう結婚相手を見つけたいです」

「ええっ、そう…？ なんか私とフェザーってすれ違つてる気がしない？」

「でも、今ごろ探してらっしゃるかも」

「これ幸いと一人でのんびり寝てるかもよ

「もしそうだつたらどうするんですか？」

「日本にはねアユル、『据え膳』っていう言葉があるの。当然いただくわ」

夜空にひそやかな二つの笑い声が広がった。

その数日後、私の部屋にやつて来たアユルを見て、私は仰天した。

「アユル……髪が！」

彼は、お尻まであつたあの見事なウェーブヘアを、あごの線でバツサリ切り落としていた。

彼はもう魔法庁の制服のローブすら着ていなくて、白のシャツに臙脂色のズボンという少年らしい格好で片膝をついた。

「ごあいさつ伺いました、王妃様。僕、魔法庁を辞して修道院で働くことになりました」

マイラーと並んで馬を走らせながら顔を上げると、前方に緑の山が見えてきた。あの山の中腹に、アユルが働いているはずの修道院がある。

まさか王妃が城から逃げ出して自分に会いに来るなんて、アユルはかけらも思つてないだろうな……と思いながら、私は手綱を握り直して馬を急がせた。白いつけ毛が背中で跳ねた。

10 星降る夜の密談（後書き）

次話、アユル視点です。

黄昏の女神シャンピの残照が消え、星と夜の神—ユイスが支配する時間が訪れると、僕はいつもあの方を思い出す。夜の庭園に、夜色の髪を背中に流して立っていても、闇に溶け込まずに存在感を放つていたあの方。雄々しいと言つてもいいくらい凜とした王妃様。もしかして王妃様が夜の神の化身だったから、女みたいな僕は黄昏の女神みたいに、夜の端っこにくつついてその力を分けてもらえたのかも。だから今、強くいられるかも知れないな。

僕は窓から離れて、あたりを見まわした。部屋のあちこちには花がふんだんに活けられた花瓶が置かれ、凝った意匠の長椅子や机が上品な雰囲気を醸し出す。

ここが今の、僕の仕事場。僕の唯一の武器で戦うことができて、同時に身を守ることができる場所。

魔法庁に勤めていた頃、そこを辞めることを決めた僕は、王妃様にあいさつに行つた。王妃様は短くなつた僕の髪を見てひどく驚かれて、急いで人払いをして下さつた。

「修道院に行くつて！？」

長椅子に並んで座るなり、王妃様は急きにむよつてお尋ねになつた。

「ちょっと、魔法庁の人間関係や男女のこととに倦んでしまつたので、己を見つめ直してみようかと」

用意していた台詞を並べると、「あなた何歳なのよ一体」と王妃様は黒い瞳をくるりと回す。僕は付け加えた。

「あ、王妃様みたいな素敵なお出会いを諦めたわけじゃないです。聖職者や修道士にならなければ、結婚はできますし」

「そ、そり……アユルがそれでいいなら、私はいいんだけどね。長官は、何で？」

「ホツとなさつてました。長官も後悔なさつてたみたいですね。良かつたです、お互に納得して終わりにできて」

正直な気持ちを言つて、僕は笑つた。

子どもの頃から僕は、「可愛い」「女の子みたい」と言われて育つてきた。そんな僕が笑顔を向ければ、たいていの人　特に女の人は笑顔を返してくれた。だから、たとえ孤児院出でも僕は他の子どもとは違う、これからもずっと愛情を向けてもらえるんだと思つていた。

でも、それは子どもだからこそだつた。こんな僕でも成長し、少しずつ大人になつて行く。それなのに僕は、自分に向けられる視線の意味合いがだんだん変わってきていることに気づかない今までいた。甘えていたんだ。

そんな風に今まで來たから、実は年上の女性と付き合つのは長官が初めてじゃなかつた。でも、抱き合つている最中にふと田が合つた瞬間、急にわかつたんだ。今、僕は「愛されていない」つて。

そして僕がそれに気づいたことに、長官も気づいた。瞳つて、気持ちを映すんだね。

「ごめんなさい、アユル」

僕の身体を放した長官の、後悔でいっぱいの瞳を見て、僕も自然と謝つていた。

「僕こそ、ごめんなさい」

甘えてて、ごめんなさい。

そして、これからどうしよう……って裏庭の東屋で一人考えている時に、王妃様に会つたんだ。

僕は、手にしていた細長い箱を差し出した。

「王妃様が色々話して下さったおかげで、僕も今回のことのことを決められたんです。ありがとうございました。これくらいしかお礼ができないんですが……」

王妃様は両手で箱を受け取ると、尋ねるような瞳で僕を見てから開けた。中には、切り落とした僕の髪が入っている。魔法官見習いでなくなつた僕にはもう必要ないな、と考えた時、これは王妃様に差し上げなくては、と思つたんだ。

「これ、アユルの髪……？」

「はい。噂で聞いたんですけど、王妃様は姿をくらます想像をなさるのがご趣味だとか」

「ええ？ 趣味ってことになつてゐるの？ まあいいけど」

苦笑いする王妃様に、僕は髪の束をすくい上げて見せた。

「それならこれ、カツラとかつけ毛に使えませんか？」

すると突然、王妃様は黒い瞳を輝かせて、髪の束ごと僕の手を握りしめた。

「ありがとうアユル！ いやもう逃亡するとしたらいこの黒髪がネックになるのはわかってるのに、『一般女性と同じ首飾りをしたいわー』なんて言つちゃつたおかげで『一般の人と同じ髪の色のカツラが欲しいわー』ってのは何だかあからさますぎて言ひ出しつくかったのよね、いやもう本当にありがとう！」

その時。僕の手と、髪の束と、王妃様の手が重なつた場所が、ふわりと温かくなつた。魔力の反応だ。

「あつ」

僕は目を閉じて、太陽の光を浴びるよつよつとの波動を受けとめた。手のひらに鳥のヒナをのせた時のような、軽いようで重い命の重みと、小さな鼓動が伝わつて來た。これは……。

「どうしたの？」

動かない僕を心配して、王妃様がもう片方の手で僕の腕に触れた。

僕は目を開いた。いくらこの世界の魔力が今では儚いものになつても、生命の息吹は間違いようがない。

唇を湿して、ドキドキしながら告げる。

「王妃様、もう夜の方、そんなに頑張らなくてもいいみたいですよ

王妃様は少しの間、呆然としていた。そして、ちょっと口を開けたり閉じたりしてから、思わずと言つた様子でお腹に手をやつてから、こう言つた。

「…………それじゃ、しばらくお酒は飲めないわね」

僕は声を上げて笑つてから、ソファを降りて片膝をつき、王妃様の手の甲に口づけをした。

「おめでとうござります。遠くから、ご無事の出産をお祈りしています

ます

実は、修道院に働きに行くというのは、王妃様や長官を心配させないための口実みたいなものだった。

もちろん実際に修道院に行つたし、そこで平和に暮らせたらそれで良かつたんだけど、いくら氣をつけていても自分の外見がこうである以上、俗世間でも修道院でも起こるべき事は起こってしまう。

あつという間に修道院を飛び出でざるを得なくなつた僕は、とある街のある店に行つて雇つてもらつた。以前付き合つた女性から聞いていたその店では、僕のこの外見が商売道具にもなり、また自分を守る鎧にもなつた。

さあ、今日も営業開始時間がやつてきた。

扉から次々と入つて来る女性たちに、笑顔で応対する。席に案内して、飲み物の注文を聞く。

しばらくして、大きなショールで頭と顔を覆つようにして隠した

女性が入ってきた。きっとこういった店に入るのが恥ずかしいのだろう。

僕は近づくと、ニッコリと笑いかけた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

その女性はハツとこちらを見ると、少し赤くなつた顔で軽くこちらをにらんだ。黒い瞳……黒？

「修道院にいないから、探したわよアコルつ。何なのこのお店、『小姓喫茶』ひたむき『さき』つて！」

僕は仰天して叫びそうになつた。

「お……！」

王妃様！

1.1 境天使の受胎告知（後書き）

明日は更新お休みします（逃げつ

【闇話】メイラーの分際で

その日泊まつた宿には、客室に温水を引いた小さな浴室があつた。俺は寝台に腰かけて、そこから水音がするのを落ち着かない気分で聞いていた。

現在、俺とシーゼ様は、元魔法官見習いのアコルを探して旅をしているところだ。そして、夫婦のふりをして、この宿に泊まっている。

シーゼ様が突然俺の家を訪ねてこられた、その翌朝のこと。

自分の家にシーゼ様がいらっしゃる そして本来なら同じ卓で食事を採ることなどないシーゼ様と俺が一緒に、とは。一体どういった運命のいたずらなのか。

戸惑いの消えない俺とは対照的に、シーゼ様は当たり前のように食事を終えられると、澄んだ黒い瞳をこちらに向けられた。

「ねえ、もしも私が犯罪を犯して逃げてるんだったら、大勢の追手がかかると思うんだけど、そういう場合の追手ってどの程度のものだと思う?」

俺は、城に勤めていた頃の記憶を掘り起こしながら答えた。

「シーゼ様のお話では、祭司長のグレッド様は国王陛下の留守中に、数人の僧兵だけを従えてシーゼ様を聖堂におびき出し、元の世界に還そうとしたということでしたね」

「うん。しかも襟章からして、たぶん一番下位の僧兵が三人だけだった。彼らは何も知らずにあそこにいたと思う」

「ふむ……もしシーゼ様がそのままお還りになつていたら、彼らはそれを証明する目撃者になつっていたわけだ。『王妃様はお心を病ま

れ、祭司長の手で元の世界に還られた』と

しかし、彼らはシーザ様が還らなかつた場面を見てしまつてゐる。それはグレッド様にとつてはばらされたくない事実だらうな。彼らはどうなつたのだろうか。

「グレッドが私に追手をかけよつと思つたら、信頼できる部下をこつそり動かすしかないよね？」

「そうつぶやくシーザ様に、俺は考えながら答えた。
「その場合は、聖堂騎士団の祭司長直下の隊を使うでしょうね。全員を動かすと目立つので、せいぜい十人弱……。いや、もしかしたら、まったく関係のない傭兵などを雇うといふことも考えられる」「え、そんな外部の人に、王妃が逃げたから捕まえてくれなんてしやべつちゃう？」

「こう言えばいいのです。『王妃様のふりをして髪を黒く染め、王家の権威を失墜させるようなことを企む輩がいるから捕まえろ』」

シーザ様は手をポンと打つた。

「なるほどー。って、感心してゐ場合ぢゃないや、それなら結構大々的に人を動かせるじゃないの！」

「いえ、大々的には無理でしょ。国王陛下にはシーザ様の不在を隠してはおけませんから、おそらくグレッド様は陛下には『王妃様は元の世界に還られた』ということにしてゐるはず。その上でシーザ様を捕えようとなさるのなら、やはり密かに動くしかありません」

「そつか。じゃあ一番あり得るのは、傭兵を何人か雇つて『王妃のふりをした女がいるから、模倣犯が発生しないように密かに捕まえろ』って感じ?」

「御意」

「じゃあ日本にいたころみたいな感じで注意すればいいのかな、基本的に……」

シーザ様はふむふむとうなずきながら立ち上がると、部屋の隅の

寝台に腰かけて黒髪が見えないよう髪をまとめ直し、つけ毛をつけた手巾をかぶりながら頷かれた。

「とにかく、なるべく目立たないようにしないとな。やつぱりメイラーがいてくれて良かつたわ、女一人旅は目立つけど、夫婦で旅をするならそりでもないもんね」

「は？」

「私とメイラーが夫婦のふりをするのが、一番目立たないでしょ？」

「こうわけで、もう一度言ひ。

俺とシーゼ様は夫婦の、そう『夫婦』の！　ふりをして、宿で同じ部屋に泊まっている。

これが心穏やかでいられようか、いやいられるはずがない！

「あーさつぱりした。メイラー、次どうぞ」

シーゼ様が布で髪を適当に拭きながら、浴室から出てこられた。俺は思わず視線を泳がせた。ぬ、濡れ髪……シーゼ様の黒く艶やかな濡れ髪。

城ではシーゼ様の入浴後、おそらく侍女たちがすぐに髪を乾かしていると思う。つ、つまり、国王陛下さえシーゼ様の濡れ髪を目にすることはあるかないか……つ。それを今、俺が！

「どうしたの？」

寝台に腰かけたシーゼ様がこちらを見たので、俺は少し離れた場所で片膝をついた。

「いえ、その……俺は無骨者ゆえ、どのようにシーゼ様のお手伝いをしたらよいか皆目検討がつきません。侍女のようになまけませんが、俺にできることがあれば何でもお申し付けください」

「ありがとう。でも大丈夫、日本では全部自分でやってたから」

シーゼ様はにこりと笑った。

「むしろ」うちがあ礼したいくらいだもん、もう王妃付きの騎士じゃないのに付き合ってくれて。ここに調理場がついたら、メイラーに美味しいご飯くらい作つてあげるのにな」

「あ、それより足は大丈夫? マッサージとかするなら手伝えるよ
？」

「ぐはっ。い、いえ、今口は痛みません」

俺はすつと立ち上がりませた。本当は、全く痛まないわけではなかつたが。

「そう? ジャあとにかく、お風呂入るくじうど。……あつ」
シーザ様は、まだ湯のぼりの残る紅色の類のまま、上田遣いで俺を見た。

「でも何かあつたら怖いから、浴室の扉は少し開けておいてくれないかな……?」

れ、連続攻撃か……つ。

俺は胸の鼓動を意識しながら答えた。

「いえ、俺は拭くだけにしておきます。ただでさえ万全にシーザさまをお守りできない身体ですので、ゆっくり風呂に入るのはせめてアコルと合流してからに」

交代要員もいないのに、無防備な状態になるわけにはいかない。
俺なりの矜持だ。シーザさまもそれはわかつて下さったようだ。

「そつか、わかつた。じゃあせめて背中……あ、いや何でもない、
『めん』

言いかけたことをシーザさまは慌てて打ち消したが、俺はすでに想像してしまつていた。

俺の裸の背中を、シーザ様が優しく拭いて下をついている姿を!
シーザ様は苦笑いなさり、

「『めん』『めん』、節操ないこと言つたね。あーもう、これじゃアコルに『こんなことしちゃダメ』なんて言えないよねホント……さて

もう寝ようかなー

と話を終わりになさったが、俺はさらご想像してしまっていた。

あの美少年がどんなダメなコトをしたって！？

俺は浴室に入ると、まずは頭に冷たい水をぶっかけたのだった。

【闇話】メイラーの分際で（後書き）

タイトルが可哀想すぎると思った方、メイラーに応援よろしくお願
いします。

12 それぞれの仕事（前書き）

お気に入り登録2,000件突破、そして前話のマイラーに応援ありがとうございます！

城下街に次ぐ規模の街、エングル。大きな噴水のある広場は彩色されたタイルで美しく舗装され、荷車や馬車が賑やかに行きかっている。広場に面した店はどこも華やかに装飾され、大勢の客が出入りしていた。

俺は道端のベンチに腰かけて公報紙に目を通しながら、とある店の様子をそれとなく窺っていた。あの店に入るには、俺は場違いすぎて目立ってしまう。店の看板には「小姓喫茶『ひたむき』」という文字……男が入つて悪いことはないのかもしれないが、やはり女性客が多いようだ。

「？」

ふと、俺は目だけを動かしてあたりの様子を窺つた。今、俺のようには何かを監視しているような視線を感じた気がしたのだが……気のせいいか？

いや、用心するに越したことはない。怪我をきっかけに故郷に戻つてしまはる経つ俺は、実戦の勘が完全には戻つていかない自分を信頼することができない。少しでもおかしいと思つたら、用心するべきだ。

さりげない動作で読み終わつた公報紙をたたみ、上着の内側の隠しにしまいながら立ち上がつた時、店から一人の人間が出てきた。シーザ様と、そして……。

「あー、本当にメイラーさんだ！」

元・魔法官見習いの少年、アユルだつた。くせのある髪をあごの線で切りそろえた彼は、少し背も伸びて以前のような少女っぽさは薄れていたが、やはり美しい見目をしていた。

「お話るのは初めてですよね、アユルと言います。よろしくお願ひします」

礼儀正しくあいさつする少年に、俺もあいさつを返す。

「メイラーだ。そうか、王……シーゼ様の元で働いていた時期は少ししか被っていらないんだな」

「はい、僕の方が先に辞めてしまったので。でもシーゼ様のお部屋の前で、よくすれ違いましたよね。あ、立ち話も何なのでこちらへどうぞ。僕ちょっと休憩もらってきたので」

アユルの案内で店の裏手に回ると急な外階段があり、三階まで登った。隣の家の壁がすぐそばまで迫っていて窮屈に感じられたが、

シーゼ様は

「ここ逃げやすそうね、屋根とか云つてわ」とあたりを見回している。

たどり着いた扉を開けると、廊下も何もなしにすぐ部屋になつていた。両側の壁に沿つて置かれた一つの寝台の間に小さな机と椅子、棚が一つ……それでほとんど一杯の部屋だ。アユルが小さな窓を開けて風を通しながら、

「僕と同僚が住んでいる部屋です。狭くて申し訳ありません、でもゆつくり話ができるので」

「何、だか落ち着くわ、この瓜さ。どこにでもすぐに手が届くのがいいのよね」

シーゼ様が部屋を見まわして褒めている。本当にそう思つているらしい。

シーゼ様とアユルは椅子の一つと寝台にそれぞれ腰かけ、俺は椅子を一つ借りて開け放したままの入口の扉から外を窺える位置に座つた。念のためだ。

「王妃様、まさか姿をくらます想像を実行に？ 本当にお城から出てこられるなんて」

まさか本当にシーゼ様が逃亡中だと知らないアユルは、面白そうに言った。場所が場所であるし、シーゼ様もごく普通の街娘の格好

なためか、ややくだけた口調になつてゐる。

「でも、お忍びで僕を訪ねて下さるなんて嬉しいです。よくここがわかりましたね」

「あー、うん。一度は修道院に行つたのよ、山道を馬でえつほえつほ登つてさ。それでたどり着いてみたら、アユルはもう辞めたって聞いて」

シーゼ様は何から話していいか迷つてゐるようすで、ちょっと視線を泳がせている。

「院長様に、アユルがこの街にいることを教えていただいたの」

「あ、僕、院長様にはこの街で仕事を見つけたことを手紙で知られてありましたからね……でも、よくすんなりと教えて下さいましたね」

「この髪のおかげ」

シーゼ様がショールを取ると、アユルの髪で作ったつけ毛の三つ編みが現れた。

「院長様つて、魔力を感じ取る力がありなのね。すぐにこれがアユルの髪だつて気がつかれて、『アユルが髪を渡した方になら』って教えて下さつたんだ」

俺は一人の会話を聞きながら、その時のことと思い出す。あの時はひやりとした……つけ毛に気づかれたということは、シーゼ様が髪色を隠しているとバレたということだからな。しかし院長はそのことは触れず、シーゼ様と俺をじっと見つめて微笑んでいらっしゃつた。

「後は、このエングルの街で評判の美少年を探せばいいわ、と思つて街の人聞いてみたら、『美少年がお望みならあの店がいいよ』つて勧められちゃつた」

肩をすくめるシーゼ様に、アユルはからからと笑うと寝台から降りて片膝をついた。

「王妃様になら僕、最高のおもてなしをさせていただきます」

芝居がかつた動作で片手を胸に当て、頭を下げるアコルに、シーザ様は両手を胸の前でぶんぶんと振った。

「やめてよもう！　お城にいる時はこんなもんかと思つてみんなにお世話してもらつてたけど、街のああいの店に入るのはすぐ恥ずかしかつたんだから」

アコルははずみをつけて、寝台に座り直した。

「ふふ、そうですか。でもおかげ様で、結構楽しく働かせてもらつてます」

「本当？　辛いことはない？」

「はい。僕、考えたんです」

アコルは素直な瞳でシーザ様を見つめた。この少年、城にいた頃よりも明るい表情をしている気がする。

「この外見に甘えていいないで、まずは他にもう一つ外見をしているの中に混じつてみよつて。そこから僕だけの個性つていうか、僕だけにできることが見つかるかもしねりないし。見つからなかつたらそれはそれで、埋没するのも楽かなつて」

「なるほどね。それで、今のところはどう？」

シーザ様がどこか優しい聲音でお尋ねになると、アコルはちょっと困つたように笑つた。

「それが僕、かなりの売れっ子になっちゃつたんですね」

なんかこいつムカつぐぞ。俺はげつそりしたが、シーザ様は大笑いされている。

「あはははは、それじゃあもう開き直るしかないわね！　強引なお密さんとかいない？」

「そういう人は出入り禁止になっちゃうんですよ、この店。だから今は、一生懸命稼いでます。いつかやりたいことが見つかった時の

資金ですね

「うんうん、お金のために働くのも大事なことだよね」
うなずいたシーゼ様は、何かを思い出す表情をされた。

「私も日本にいた頃は、いつかバーツと使ってやろうと思ひながら
お金のためにだけ働いてたなあ。やりたい仕事はできなかつたから」

「王妃様がおやりになりたかつた仕事って、何ですか?」

アコルが興味津津に尋ねると、シーゼ様は含み笑いをなさつた。
「内緒……」

「うわ、よけい気になりますよそれ」

「え、いやー、恥ずかしいな。まあいいか、あのね
ちょっと小首を傾げた動作に照れを滲ませて、シーゼ様はおっしゃつた。

「絵本作家。えへ」

俺とアコルは素早く視線を交わし合つた。
シーゼ様はギロリと俺たちを見た。

「ちょっと。今の視線の意味はイルフレートなしでもわかるわよ。
『こいつの書いた絵本なんか子どもに見せられるか?』『無理だね』
つて意味でしょ、ふん」

「そ、そんなんでもない!」

「きっと斬新なものを書かれるのでしょうかー」

あわてて表面を取り繕う俺たちに、シーゼ様はもう一度鼻を鳴らしてから、パンと手を打ち合わせた。

「さて……と。アコル、実は私、聞きたいことがあつてここに来た

の

帰還の魔方陣についてアコルに聞くためには、事情を話さないわけにはいかない。巻きこむように心苦しかったけど、私はあつたことをそのままアコルに話した。

「感じ悪いと思つてたんですよ、あの祭司長」

話を聞いたアコルは、さつくつと言つた。口調はさつきまでと変わらないけど、あらり、田が笑つてないよ。

「いくら王太后様に取り立てもらつて祭司長になったからって、フェザリオン陛下よりも王太后！　みたいな空氣作つてゐるのの人じゃないですか？　それに何かと言つと、王ひ……シーゼ様のことちらちら見てて、見張つてるみたいで嫌だつたな僕は」

「そ、そうだつたの？」

珍しく剣呑な雰囲気のアコルに、私はちよつとタジタジ。

「結論から言います」

アコルは私をまっすぐ見て言つた。

「シーゼ様を元の世界に還すのは、今の時点では不可能だと思います。シーゼ様が追い込まれそうになつたのは、帰還の陣じゃない」

「根拠は？」

すぐに戸口の方からメイラーが言葉を投げた。アコルはメイラーと私を交互に見ながら説明する。

「百十代田の国王妃を召喚した数年後に、もう百十一代田の国王妃を召喚しなくてはならなかつた時の話は、どなたからお聞きになりましたか？」

「ん？　九十九代と百代じゃなかつた？」

まあどつちもキリ番ゾロ田が連続で来ちゃつた例だから同じか。

「ああ、『悪夢の一一年間』ですね」

魔法庁ではそんな呼び名で語り継がれているんですか。

「その時はちょっと特殊でしたね。九十九代目の国王妃を召喚した直後、九十九代国王が急な病でお亡くなりになつたので、次の百代国王妃をすぐに召喚しなくてはならなくて悲惨なことになつたんです。ギリギリの魔力で召喚したもの、成人女性ではなく赤子が召喚されたとか」

……それはひどいな。誰にとつても、ひどい。何でそこまでして、「でも百十代と百十一代の時は、『悪夢の一一年間』の教訓もありましたし数年の間がありましたので、準備ができました」

「準備？」

「はい。魔力を受けとめて練ることのできる素質を持つた人間を、魔法庁が数年前から大量に雇い入れていたからこそ、『』く普通に魔力を溜めて召喚を行うことができたんです」

黙つて聞いていたメイラーが、口を挟んだ。

「言われてみれば、その頃は隣国、ダーナ・ディルスとの関係が緊張状態にあつたこともあって、あらゆる不測の事態に備えておこうという空氣があつたようです。極端な話ですが、当時の国王が戦で急に戦死する可能性さえ考えて、次の召喚の準備をしていました。しかし今は……」

「はい。平和ボケして緩みきつてますからね、王家はアユルは腕を組んだ。

「魔力の備蓄なんか、帰還の陣を作れるほど大量にあるわけないんです。それだけの魔法官だつて揃つてない。シーザ様を還すのは、まず無理ですね」

「じゃあ、グレッドは何で元の世界に還すなんて……」

「つぶやく私。アユルも考え込んでいる。

「その場にいた僧兵たちに、シーザ様が還るところを見せようとしたんですね？ それなら、シーザ様をどこかに移動させようとしたのは間違いないと思うんですが」

移動……どこへ？

その時、開け放していた窓から鐘の音が聞こえてきた。アユルが顔を上げる。

「あ、『ソレスの帰還』の鐘だ。すみません、僕そろそろ休憩時間が終わりなんです」

ソレスというのは、この世界の太陽神の名前だ。この世界には四人の神様がいて、“太陽神”ソレス、“星と夜の神”ニユイスが兄弟神。それと、“暁の女神”ドライリと“黄昏の女神”シャンピがいる。

一日の時間はこの四人の神様にちなんで四つに分けられていて、“ソレスの帰還”っていうのは太陽の神様がそろそろ家に帰る時間っていうことだから、だいたい午後の三時くらい。ややこしいな、この世界に来て最初のうちはイルフレートが地球時間に訳してくれてたんだけど、私がだんだんこっちに馴染んできたら訳してくれなくなっちゃって。

「あっ、忙しいのに」めん。休憩時間使わせちゃったね」

私が急いで立ち上ると、アユルは二二二二口した。

「休憩時間にシーゼ様とずっとお話できるなんて、嬉しかったです。まだこの街にいらっしゃいますか？」

言われた私がメイラーを見ると、彼は

「まだお聞きになりたいこともおありでしょ？ 事態の急変がなければもう少しここに滞在しましよう」とうなずいた。良かつた、そうしたかったんだ。

「今日は何時に仕事終わる？」

聞いてみると、アユルは

「うわあ、王妃様と待ち合わせですか！」

つて瞳をキラキラ。うわー、そりゃあんた、売れっ子にもなるよ。

「夜、私たちの泊まってる宿に来れない？ メイラーをお風呂に入れてあげたくて」

「？？？」

疑問符を飛ばしているアコルに、私はメイラーが私の警護のため
にゆっくりお風呂に入れていないこと、彼がお風呂に入ってる間ア
コルに私のそばについて欲しいことを説明した。メイラーは後ろで「
あ」だの「う」だの言つている。まーまー、照れるなよ。

「僕なんかで警護の代わりになるかな……まあ、誰もシーザ様のお
そばにいないよりはいいですよね」

アコルはうなずいてから、何やらニヤニヤしてメイラーを見た。
「そうですよね、ずう一つとシーザ様と一緒にきりだつたんですねも
んね。大変でしたねメイラーさん」

メイラーは苦虫をかみつぶしたような顔をして、黙り込んでしま
った。なんであんな顔してるんだるう？

「それじゃ、後で宿の方に伺いますね！」

一緒にお店の前まで行くと、アコルはそう言つて元気よく仕事に戻つて行つた。私とメイラーも、宿に向かつて歩き出す。

エングルの街はメインの通りにモザイクタイルが敷かれていて、華やかですごくきれいだ。ここはさつき話にも出た隣のダーナディルス王国との交通の要衝になつていて、通行手形の発行を待つ旅人を当て込んだ商売人がたくさん集まつてゐるんだって。そんな街で小姓喫茶とかやつちやう『ひたむき』の店長、思い切つたことするな。

赤ちゃんを抱いた女人を見かけて、ちょっと目で追う。　ウ
インガリオン、元氣にしてるかな。私なんかより、よっぽど乳母さんが上手にお世話してくれてるとは思うけど。

少し物思いに沈んでいたら、メイラーに軽く腕を引かれた。そのまま道の端に避けると、前方からガツチャ、ガツチャという音。力一キ色の制服を着た警備兵が歩いて来つて、腰に佩いた長剣が重そうな音をたててているのだった。

そう言えば、とメイラーに目をやると、彼の腰にも長剣がぶら下がつていた。こっちの世界では、彼みたに私服姿の人々が往来で剣を持つて歩いていてもおかしくはない。休暇中の兵士か、何かの用心棒かと思われるだろう。

この街では中の上といったランクの宿屋に到着して、客室に入つた。メイラーは窓を開けてあたりを見まわし、もう一度閉めてから、帯ごと剣を外してテーブルに置いた。

「剣つて、結構重たいんでしょ？ 足に響かない？」

聞いてみると、彼は苦笑いしながら剣を鞘から抜いて見せた。剣は、鞘の半分の長さしかなかつた。

「申し訳ありません、靴はハツタリです。おっしゃる通り長剣はかなり重く、ただでさえ左の靴の方が右よりもすり減るほど左足に負担がかかる。しかし追手になめられるわけにはいかないので、見かけだけはこのようにしてあります」

「へえ、工夫してるんだ」

私は思わず、剣を持たせてもらつたり靴をのぞいたりしてしまった。メイラーはニヤリと笑つて、

「これを補う武器はちゃんとありますので、『ご安心を』だつて。足を痛めていても、メイラーは頼もしいボディーガードだと思つわ。

「ところでシーザ様、これを」

彼が上着の懐から出したのは、公報紙だつた。数日に一回発行されるそれは警備隊が無料で発行していて、自警団の詰め所や小聖堂など公的な場所で配られている。わら半紙にガリ版刷り　あ、謄写版つて言うんだつけ。そんな感じの新聞だ。

文字はだいたいわかるので、私は目を通した。日本にいた頃、外国人人が日本語学校で勉強すると約一年半で生活に困らない程度に読み書きできる、と聞いたことがあつたので、一年半だなよし負けるもんかー！　と思つて勉強したんです。負けず嫌いなもので。

「あ、私のことが書いてある。『王妃が体調を崩したので、しばらく公務は控える。王太子のお披露目式も延期』……あーっ、そうだワインガリオンのお披露目式やる予定だつたつけ！」

忘れてたよ、せっかくハーヴの民の皆さんに息子を見てもらおうと思ったのに。つて問題はそこではなくて。

「王妃が元の世界に帰つた、とは書いてないね。対外的には隠すつもりなんだ」

「ひとまずは、ですね。どう発表するか協議中なのでしょう。……もしかしたら、国王陛下かどなたかが、祭司長の言い分を疑つていらつしやることも考えられますが」

メイラーの言葉に、私は夫の顔を思い浮かべた。

フェザーはあんまりやる気のない王様だけど、物事をよく見ていい
る。……疑つてくれるかなあの人。

そう考えた時、私は初めて気がついた。私、「夫とグレッドがグル」つていう風には考えたことがないな、って。
あり得ないわけじゃないよね。夫は国王なんだから、世継ぎが生まれて用なしになつた異世界の女をどこかへ片付けて、妻にするメリットのあるどこかの美姫を正妃にしてウハウハ、つていう可能性も。

ふつ、と笑いだした私を見て、メイラーが不思議そうな顔をして
いる。

ないわ、ないない。あのフェザーが。私は、ウインガリオンが生
まれた時のことを思い出した。

陣痛にパニックになつた私が、

「もうやめる、もう逃げる！ ギヤー！」

つて叫んでるのを別室で聞いていたフェザー、自分も青い顔をして
お腹を抑えてたつて、後で聞いたんだ。そんな纖細なフェザーが、
この私に隠れて陰謀をめぐらせられるわけがない。

ちなみに私はその時、国家体制批判（「これやらせるために召喚！？ ふざけんなー！…」）やら国王に対する暴言（「こんな目に遭うのフェザーのせいだ、一生恨んでやるーーー」）やらも叫んだらしく、フェザーだけでなく医者も産婆も青くなつてたそうな。私は覚えてないんだけど、まあこれも済んでしまえば楽しい笑い話よね。

宿の食堂で簡単に夕食を済ませ、再び客室に戻る。鐘の音が聞こえて窓の外を見ると、ずっと遠くの山の端に夕陽の残照が残るばかりで、夜空には星が瞬き始めていた。今のは“黄昏の女神”シャン

ピの帰還の鐘だから、だいたい夕方の六時過ぎってところかな。これからは“星と夜の神”ニユイスの支配する時間になる。

「そろそろ、アユルが来るかな」

私が言つた時、廊下から足音が聞こえて部屋の前で止まつた。トン、とノックの音。

「こんばんは、僕です。お約束もないのに、すみません」

アユルの声に、私はメイラーと顔を見合せた。『お約束もないのに』？ ちゃんと約束したじやん。

一瞬の後、はつとした。アユルはおそらく誰かと一緒にいて、その人物に気づかれないよう私たちに警告してくれているんだ。約束もしていない、不躾な客人がここにいるよ、と。

メイラーがテーブルの上の剣を手にしながら、扉に向かつて言った。

「ちょっと待つてくれ、今彼女が服を着るから」

どういう設定よ、と思いつつ、私はスカートをはいでいるのも構わずそつと窓を開けて窓枠に足をかけた。何かあつた時のためにメイラーが隣の客室も取つておいてくれてるので、私は窓からそちらへこつそり移つて身を潜めればいい。メイラーを置いて行くのは心配だけど、相手が私を狙つた追手なら、私が姿を消してしまつのが一番だからね。

でも、残念ながらこの手は使えなかつた。私は上げていた足を元に戻して言った。

「メイラー。外にも誰かいる」

ちつ、とメイラーの舌打ち。しそうがない、見つかっちゃつたら人數ではどうしたつて負ける。

私は開き直ると、彼に言つた。

「アユルが心配だわ。扉を開けて」

メイラーが抜き身の剣を構えたままレバー式のロックを外し、私の斜め前まで下がつた。

向こうからゆっくりと扉が開くと、そこには悔しそうなアユル。

そして、そのすぐ後ろに背の高い男が一人立っていた。逆立てた短い白髪、そしてごく薄い紫の瞳の男は、あごから肩にかけて大きな布を巻きつけたような格好をしていて口元が見えない。

男は無表情のまま、アユルを押して中に入つて来た。たっぷりした袖口の手をアユルの肩というか首の近くに置いているのは、たぶん何か武器を持つてるんだろう。でも、殺氣どころか緊張感さえない様子……さつと、唸り声を上げる獵犬よりも、爪を隠した鷹の方が怖い。

彼はそのまま軽く目礼すると、低くこもつた声で言った。

「お迎えに上がりました、王妃様」

「先ほど、陛下が小聖堂にお見えになつていらっしゃいましたよ」事務仕事をしている修道士の言葉に、私は立ち上がると祭司長室を出た。石畳の回廊を行く歩調が、自然と早くなる。

すでに“一コイスの目覚め”の時刻で、等間隔で壁に穿たれた燭台用の穴から明かりが広がっていた。その先の階段を上りながら見上げると、聖句の刻まれた小聖堂の扉が見える。両開きの扉は片方が開いたままになっており、水晶で作られた壁は外気との差で少し曇っていた。中に灯された燭台の火で、あたりはぼんやりと明るい。声が天井に反響して聞こえてくる。私は中からせこちらが見えない位置で立ち止まると、耳をすませた。

「ここから、妃は元の世界に還つたのだな」

陛下の落ち着いた声に、おそらく僧兵の誰かの声が答える。「はい。祭壇の前のこのあたりに、陣が開かれていざこまして」

「妃の様子はどうだった」

「動搖していらっしゃるようでした。無理もないことですか……」

「帰還の瞬間は見たか？」

「王妃様が陣の中へ飛び込まれ、陣が強く光りました。一瞬何も見えなくなり、少しして皿を開くと、王妃様はすでにいらっしゃいませんでした」

「そうか。わかった」

私は身をひるがえして階段を少し下り、暗がりに身を潜めた。複数の足音……おそらく陛下とそのお付きの者が小聖堂から出ていったのだろう。石畳を踏む足音は、すぐに遠くなつた。

小聖堂まで確かめに来るとは……陛下は、疑つていらっしゃるのか？ 王妃が本当に、元の世界に戻られたのかどうかを。

しかし今の話では、王妃の行動に気づいた私が急いで陣を発光さ

せて僧兵たちの目をくらませたことは、疑いこそそれ確証は持てまい。まさか祭壇の奥に王族専用の逃走経路があったとは思わなかつたが、そして陛下はその経路をじく存じだらうが、確証をお持ちになれなければ同じだ。

王妃の逃亡後、密かに私一人で祭壇の下へもぐつて通路を探索した。そして、いくつかあるつきあたりの一つに王妃のドレスが打ち捨てられているのを見つけて愕然とした。

ドレスを脱いだということは、着替えが用意してあつたといふことになる。何と周到なのだ。

あのお方は予想外の行動をお取りになる……見つけ出すことはできるだらうか。私は再び祭司長室への道をたどりながら、王妃のことを思い出していた。

王妃が私をお呼びになつてゐる、と聞いて、ある暖かな日の午後に王妃の部屋へ出向いた。結婚式のしばらく後のことだ。

彫金によつて蔓草の模様を浮かび上がらせた豪奢な扉にたどり着き、中に入ると、そこは控えの間になつてゐる。すぐに侍女に取り次がれて次の間に入った。

王妃は、出窓に腰かけて本を読んでいらした、らしい。よいしょと床に降りて、靴を履いているところだつた。

「早かつたのね、祭司長」

「……王妃様。本は椅子でお読みになつて下さる」

一言言つと、

「さつそくお小言來たー。だつてこの部屋だと、あそこが一番落ち着くんだもん」

とドレスの裾を直しながら受け流された。

「窓から逃げやすいですから」

私が少し呆れて言うと、王妃は両手の人差し指で私を指さして「言つよねー」とニヤリと笑つてから、「いやいや、祭司長考え過ぎ。単に、本を読んだり窓から外をぼーと見たりできるのが幸せなだけ」とおっしゃった。勘ぐりすぎるのは私の悪い癖だ。

その王妃の手の片方、人差指以外の指で持つていた本に見覚えがあつた。それは王妃を召喚してすぐ、この世界のことを知っていただくために私が差し上げた、神話をわかりやすく描いた絵本だつた。「私、絵本好きなんだよね」

王妃は私の視線に気づき、両手で本を軽く持ち上げる仕草をした。脇の小卓で茶の準備をしていた年かさの侍女が、

「多くの方から数々の贈り物が届きますのに、王妃様はその絵本ばかり手に取つていらっしゃいますわね」

と笑う。思わず王妃の顔をまつすぐ見ると、王妃は「だつて」と絵本を開かれた。

「ijtjたちの神話つて、可愛らしいから」

「可愛らしい……ですか」

「太陽神”ソレスと“星と夜の神”ニユイスの兄弟は、大昔に大喧嘩をしたせいで昼と夜に分かれて会わなくなつちゃつたんだけど、実は仲直りしたいと思つてゐるところとか。それで、朝と夕方に“暁の女神”ドイリちゃんと“黄昏の女神”シャンピちゃんが入つて、昼と夜、兄と弟の仲を取り持つてゐんじょ。この女神様も、女神つて言うより妖精っぽくてきやうきやうしてて、なんか可愛い」

……王妃は元の世界では、特に信仰している宗教はなかつたそうだ。その視点でこちらの神話を眺めるとななるのか。

「それに、ijtjたちの神話つてすゞく一般の人には寄り添つた内容だと思つ」

王妃はお続けになつた。

「一日のうち、ソレスの時間とニユイスの時間は長いけど、ドイリ

の時間は明け方から陽が昇るまでだし、シャンピの時間は陽が暮れて沈むまでだから短いよね。ドイリとシャンピは、起きてから短い時間で色々な事をして、次の神様に世界を譲る。朝と夕方が忙しいのって、まさに庶民の生活だよね

私は舌を巻いた。確かに朝夕の城下では、「急がない」とドイリ様がご帰還になるよ」「もうシャンピ様がお目覚めだ」などといった表現が人々の口に頻繁に上る。王妃はその感覚を、私が差し上げた絵本からすでに読み取られていらっしゃるようだ。

「他にも色々と裏読みできて面白いんだ。ありがとうございます」「急に気安げに礼を言われ、私は黙つて目礼した。どうもこの王妃と話していると、調子が狂う。

「ところで王妃様、今日はどのような用件で……」

言いかけたその時、先触れがあつて、国王陛下が部屋にお見えになつた。近衛騎士団長も一緒だ。

「祭司長も来ていたのか。シーザー、何か用があると聞いたが」

「うん、あと一人来たら……あ、来たかな」

王妃が扉の方を見ると、女官長が「遅くなりまして」と急ぎ足で入つて来て礼を取る。侍女が茶の準備を終えて部屋を出て行つた。これは……召喚の時にその場にいた四人か。

王妃はいきなり立ち上がると、こう言つた。

「本日はお忙しい所をお集まりいただきまして、ありがとうございます。召喚という国家的大事業の中心を担つた方全員に、この報告があります」

「全員に？」

陛下が聞き返すと、王妃は笑つてうなずき、何やら片手の指を一本お出しになつた。

「できたよー、赤ちゃん」

それはやはり優先順位として夫に最初に申し上げてはいかがか！

!!

とその場の全員が思つたことだらうが、とつあえず陛下以外の二人はその場に膝をついて
「おめでとう」「ざこます」
と口を揃えた。めでたいことに違ひなく、女官長などは頬を紅潮させている。

陛下は「うむ……そつか」「よくやつたな」などと口の中でおっしゃつていたが、後に

「余もそれなりに、妃が妊娠したらびつ言葉をかけるか考えていたのだが、出鼻をくじかれたな」と苦笑していらっしゃった。少々お氣の毒だ。

それはともかく、この懷妊報告の際に王妃が付け加えた一言を、私は覚えていた。
「最初に気づいたのはアコルなんだけれどね……あ、いやいや」

……「アコル」？ 聞いたことがあるような気がするなだが……。

王妃が姿を消してしまわれ、逃亡先を考えた時に思い浮かんだのは、王妃を守つた際の負傷で退役した男のことと、王妃が口にした「アコル」という名前だった。調べるとすぐに、魔法院で働いていた魔法官見習いの少年だと知れた。

祭司長室の前まで来て立ち止まつた時、廊下の奥で闇がかすかに動いた。私はそのまま動きを止めた。

「発見しました。仲間も一人おります」

闇の中から、短くひそやかな声。

「わかつた。言つた通り手荒な真似は決してせず、例の場所に案内

せよ。私も明日には合流する」

指示するとは是の返事があり、再び闇は静かにわかだまる。私は扉を開こうとして、手のひらに汗をかいているのに気づいた。

明日、王妃は私に、どのような視線をお向けるにになるだろうか

。

私は黙つて、木の椅子に腰かけていた。私の右にもう一つ椅子を置いてメイラー、足元の薄い絨毯の上にはアユルが膝を立てて座つていて、二人ともやはり黙つている。

私たちが連れてこられたのは、小さな修道院だつた。アユルが働いていた方の修道院は、大きな街にも近くて大勢の礼拝者・巡礼者が訪れるようなところだつたけれど、私たちがいるのは辺境のさびれた村の片隅だ。修道院と言うより礼拝堂と言つた方がふさわしいような建物の、司祭さんが寝起きするための部屋にいる。

入口のすぐ横の椅子には、あの色素の薄い男が相変わらずあごを布に埋めるようにして腰かけている。

エングルの宿屋でアユルを人質にした男は、低い声で淡々と「外に馬車が待つております。お乗りください」と言った。

「わかった」

私がさつさとドアに向かうと、

「シーザ様っ」

アユルとメイラーの制止の声がハモつた。

「……私つて大概、自己中心的だけど」

私は一人を振り向いて、苦笑した。

「でも、私のために誰かが怪我したり死んだりするくらいなら、元の世界に帰るわ。だからじつとしてて」

それは、逃亡生活を始めてすぐに決めていたことだつた。大事な人が傷ついてまでここに居座るくらいなら、日本に帰つてまた逃亡生活に戻る方がずっとマシ。

メイラーが私を守つて劇場の貴賓席から転落した時の、あの身体の中が引きちぎられるような感覚は忘れられない。せつかく仕事を楽しんでるアユルが、こんなところで怪我するのも嫌だ。

「ありがとう、メイラー、アユル。巻きこんで、悪かつたわね……」震えそうな声で一人に別れの言葉を言つたのに、

「お前たちも一緒に来い」

と男が言つて「ハア？」と顔を見てしまつた。私が捕まればそれでいいじゃないの。……ますますわけがわからない。

戸惑つていろいろうちに、アユルは「良かった」と笑顔になるし、長剣を置くように指示されたメイラーはためらいなく剣を放り出して駆け寄つて来るしで、胸が熱くなつた。

世継ぎを生んで「あなたの役目は終わつた」と言い渡された私は、この世界にとつて自分はもう必要のない人間なんだと思つていた。だから、こうやって彼らが危険を顧みずに守ろうとしてくれると、申し訳ないと嬉しいのでどうしたらいいのか混乱してしまつて

ひんやりした空氣に我に返つたら、全員で外に出でいた。宿賃は前払いだつたので、問題なく裏口から。

宿の外壁の数か所に吊るされたランプが、街路に佇む二頭立ての馬車を照らしている。御者席には誰もいない。

馬車はシンデレラみたいに綺麗なものではなくて、いかにも荷馬車という感じだつたけど、後部の出入口から幌の中に入つてみたら床に毛皮が敷き詰められていて、座り心地は悪くなつた。前部は幌が引き絞られていて、外が見えない。

続いて入つて来た男は、アユルを離すと後部出入口の前に座り込んで、それきり黙つて動かなくなつた。

「アユル、大丈夫？ 無理矢理連れてこられたの？」

アユルを引つ張り寄せ、肩やら腕やらを軽く抑えて怪我の有無を観察していると、彼は申し訳なさそうに微笑んだ。

「宿屋の廊下を密室に向かう途中で、いきなり後ろから捕まえられたんです。とつさにあれしか言えなくて、済みませんでした……」

「俺の失態です。昼間、視線を感じた気がして……すぐにこの街を離れるべきでした」

メイラーも悔しそうにしている。

「ううん、もうその時には見つかっちゃってたんだよ。きっとお店を見張つてたんだ。私とアコルのつながりはまあ祭司長にバレてるとして、何でアコルの居場所がわかつたんだろう?」

修道院長だつて、私がアコルの髪を持つてたからこそやつと教えてくれたのに……と私が首をかしげると、アコルはまたまた申し訳なさそうに眉を下げた。

「ごめんなさい、そう言えば僕、生まれ育った孤児院の院長には、現住所を知らせてます……」

「アコルは悪くないって。そっか、前の職場じゃなくてそっちから辿ったか」

そんな話をしているうちに、前方の御者席の方でギシッという音がした。さつき庭側にいた誰かだろうか。そして馬車はゆっくりと動き出した。

馬車に揺られて浅い眠りを繰り返していくうつむこ、空が白み始める頃。“ドイリの目覚め”的時間あたりにこの礼拝堂に到着した。それ以来ずっと閉じ込められている状態のまま、もう“シャンピ”が起きちゃいそうな時間だ。いい加減退屈だし、簡素な食事は出たけど小腹が空いたしで、私は自分の荷物を探った。宿に置いて来たはずの荷物、御者がいつの間にか持つて来ていた、ここに着いてから渡されたんだよね。中身はチェックされたみたいだけど。

ショルダーバッグから取り出したお菓子（お城で適当な理由をつけて作つてもらつた逃亡用非常食）を一人に勧め、メイラーには丁

重に断られたのでアユルとかじつているうちに、外から馬車の車輪が小石を踏む音が聞こえた。メイラーが静かに立ち上がり、動けるよう準備をしている。

やがて、IJの居住用の部屋のドアを開けて入つて来たのは……。

旅姿の、祭司長グレッドだつた。

奴は私を見て、何やらホッとしたようにため息をついたけど、私はお構いなしに椅子を鳴らして立ち上がり、奴にびしっと人差し指をつきつけた。

言いたいことは全部お話ししておく
これでストレスを溜めない
いために大事！

するとケレラは両方の肩を上げてあんなことかひじと言つ返してきた。

「王妃様こそ、なせすんなりと陣に入つて下さらなかつたのですか
はあ？ 逆ギレ！？」

「信じていませんね？」

「しておりません」

役目は絶対にからせん鳴れで言ふがてし。
したしないのうが！」

「そのような事実は」いません。
申し上げると言つただけです」「お役目を果たされた」とにお礼

「言つた言わないの水かけ論はいいのよつ、嘘ついて聖堂に呼び出したのは事実でしょつ！」

モード・マガジン

子どものケンカか、と思つたらちょっと頭が冷えた。

落ち着き払つているグレッドはマントを外してあの男に渡し、部屋の隅からもう一脚椅子を持つてくると、ため息をついた。

「説明申し上げますから、おかげになつて下さい」

私はもう一度腰かけると、腕を組んで奴をねめつけた。こちらから仕掛ける。

「あれ、帰還の陣じゃないのね」

グレッドは座りながらちらりとアユルを見て、私に視線を戻すとうなずいた。

「そうです。あの陣は、私の生家に移動する陣でした」

「……は？ グレッドの実家？」

わけがわからずにいる私に、グレッドは膝の上で指を組んで言った。

「最初からお話します。王妃様がお世継ぎをお生みになつてすべく、私は王太后レイザ様に呼び出されたのです」

王太后様が、からんでくるの？
私はぐくりと喉を鳴らした。

王太后レレイザ様は先王の崩御以来、王城の最も奥まった所にある白陽宮という小さな宮にお住まいになつてゐる。しかし現在もレレイザ様が国政に与える影響は大きく、その小さな宮を訪れる者は後を絶たない。

私がレレイザ様の居室に入つて行くと、レレイザ様は書き物机に広げた書類を前に、本を広げて調べものをしていらっしゃるようだつた。華やかなカーテンや優美な家具がなかつたら、大きな書棚の並ぶそこはまるで執務室のようだ。

「ああ、グレッド。忙しいのに呼びつけてごめんなさいね」

装飾の少ないドレスの裾をさばいて立ち上がり、レレイザ様は書類を手にソファの方へ歩いて来られた。多少ふくよかになられたとはい、剣術を修められた身体は機敏な動きを失つてはいない。

「王妃はどんな様子？ 出産の直後に見舞つた時は、何だか精根尽き果てた感じだつたけれど、もう起き上がるようになつたかしら」
「は。こちらへ伺う途中、庭にいらつしやるのを見かけしました」
レレイザ様は苦笑された。

「そう。いえ、私が自分で王妃に会いに行けばいいのだけれど、懷妊前後に色々と口を出し過ぎてしまつたかしらと思つと行きにくくてね」

確かに……と私は思わず口を曲げた。懷妊前に王妃教育の時間にお会いした時、侍女に茶を淹れさせた王妃が、

「このお茶、『これから子どもを産む女性にいいんですつて』つて王太后様が下さつたんだけど、苦手な味なんだわ。パクチーみたい。捨てるわけにいかないから協力してよ」

と男の私まで飲まされたのを思い出したのだ。あれは……きつかつ

た。

「行きにくい理由は、それだけではないのだけれど」
レレイザ様はため息をおつきになると、手にしていた書類を私の前へ滑らせた。

「拝見します」

手に取つて目を通すと、それは隣国のダーナデイルス王国に潜ませた間諜からの報告だつた。かの国の物流の様子が、数字を挙げて細かに書かれている。

「ハーヴェステス側の国境にあるいくつかの砦に、補給が増えている。軍事訓練の回数も増えていると報告があつてね
まるで戦争の準備だ。私は眉を寄せた。

「国王陛下はご存知なのですか」

「いえ……これは先王陛下がずっと以前から使つてゐる間諜からで、まず私は報告が来たところ。まだフェザリオン陛下にはお知らせしていません。陛下は陛下で情報を得てらっしゃるかも知れないけれど」

レレイザ様は背筋をまっすぐ伸ばしたまま、私をご覧になつておつしゃつた。

「それともう一つ。ダーナの聖樹が、復活したらしくと聞きました」
魔力を溜めておく聖樹は、かつてはハーヴェステス王国だけなくダーナデイルス王国にもそびえていた。しかし数百年も昔の戦争の混乱の中、燃えてしまつたと聞いている。

「私が恐れているのは、もしもダーナに魔力を戦争に使う技が存在するとしたら? ということなの。今のハーヴでは、とても対抗することはできない

「しかし、それは

「わかっています。ハーヴでも昔から、魔法を戦力にする研究はされてきたものね。武器を上回るほどの効果的な方法は、ついぞ見つからなかつた。でもダーナが同じとは限らないでしょ? う?

レレイザ様は背もたれに身体をお預けになると、少し視線を落としておっしゃった。

「それで、ね。グレッドに聞きたいのだけれど……王妃の召喚のこと」

召喚？ どういった関係があるのだろうか。私は続きを待つた。「魔力というのは使用すると、一部は空へ昇り、それ以外は私たちの世界に再び散らばる。それは、召喚に使われた魔力も同じなの？」

「同じですが、その魔力は召喚の際に、あちらの世界の方へ散らばつていると考えられます。いわば、魔力と交換で王妃をこちらに呼び寄せるのですから」

「交換。やはりそうなのね」

レレイザ様は一つうなずかれた。

「それでは、王妃がもしもあちらへ帰還したら、その魔力はこちらへ戻つて来るのかしら？」

「ええと、つまり」

シーゼ様は難しい顔をして、あごのあたりに拳を当てている。

「私が元の世界へ帰還して、その代わりに大量の魔力が戻ってくれば、ハーヴェステスにとってそれが手取り早い武器になるかもしないということ？」

「武器……といいますか、王太后様はダーナデイルスに対する牽制になるとお考えなのだと思います」

「ふーん。それで、グレッドは王太后様の言つ通りにした、と眇めた瞳で見つめられて、ついこちらも視線に力を込める。

「即座に賛成した訳ではございません。理論上は帰還陣も存在しますが、召喚した王妃を実際に帰還させた例はない。帰還自体が失敗するかもしれませんし、もし帰還に成功しても、魔力は空間の狭間

のいざこかへと消えてしまうかもしれません

そもそも王妃の身に何が起こるかわからない。本当は、私はそれを一番恐れたのだ。

「そう言つたの？ 王太后様は何て？」

「王太后様は」

私は唇を湿らせた。

「『魔力が戻つて来るのが一番良いけれど、失敗しても結果的に正妃の座が空けば、後はどうにでもなる』と……」

王妃と、そばに控える予備役の騎士、そして元魔法官見習いの少年の三人に、不穏な空気が立ちこめた。

「……どういう意味でしょーか」

王妃様の声も低くなつた。

「詳しいことはお話し下さいませんでした。ただ、王太后様は国のために第一に考えて動かれる方で、そのためなら非情にもおなりです。王妃を正妃の座から外すと言つのは、相当の不穏なことが行われると言つこと。王妃様の身に何が起こるか……」

私は視線を外さずに続けた。

「それならば、帰還には成功したけれど魔力は戻らなかつたということにして、いつたん王城からお逃げいただこうと思つたのです。安全な場所として、私の生家を選びました」

お子のそばで過ごされて情が湧いてからよりは、今すぐの方が傷も浅いと思つたのだ。それで例え正妃でなくなつても、同じ国に生きていればいつかはまみえることもあるだろう、と。

私が元の世界に送り返されそうになつたのは、私を送り返すことで大量の魔力を取り戻すためだつた？ 用なしだから、じやなかつたんだ……。

個人的な理由で、私は少し安堵してしまつた。いやいや、この男のこと信じるなら、の話だけね。

グレッドが、何度目かのため息をつく。

「それなのに王妃様はまんまと脱走なさつて……もしも私の手の者ではなく、王太后様の手の者に見つかっていたらどうなつていたか。寝覚めの悪いことは勘弁していただきたい」

「あんたの寝覚めなんか知つたこつちやないわよ。だいたい、そつちの言つことが本当だつて、どうやって信じろつていうの？」

今までの経緯からも、素直に信じる気にはなれない私。そこへ、マイラーが静かに口を挟んだ。

「……お聞きしてもよろしいでしようか。祭司長様は、王太后様のお考えには賛同されていないということですね？」

グレッドは目線だけ動かしてマイラーを見た。

「そもそも、ダーナディルスが不穏な動きをしたから即戦争というわけではない。相手方の望みを知つて双方にとつて納得のいく道を探す、それが外交というものだらう。その道を探らずに、急に片方が大きな力を手に入れると言うところに、納得がいかないのだ」

「これ以上話が難しくなると、学のない私にはついていけなくなりそうだと思つたけど、グレッドはそれだけ言つていったん口をつぐんだ。

「……グレッドの言つてることが本当だとして、
私はしづしづ前置きをすると、聞いた。

「公報紙を読んだんだけど、私は病氣で人前に出られないことになつてゐるよね。フェザーは、王太后様のお考えや、あなたがしたことを知つてゐるの？」

「……いえ。陛下にはただ、王妃様が元の世界に戻つたとだけお伝えしてあります」

「何で言わないのよ。自分が王妃を匿つてるから安心してくれつて」とグレッドは、初めて目をそらした。

「国王陛下、だからです。国を守るためになら王太后様の言つ通りになさるかもしれない。そうなさらないと、言ひ切れますか？」

私は黙つた。

そう、フェザリオンは国王だ。一番に国のことを考えなくちゃいけない。……異世界から連れて來た女のことなんかじやなく。

部屋に沈黙が落ちた。

やがて、グレッドが口を開いた。

「王太后様が何を焦つていらつしやるのかはわかりませんが、まずは今後、ダーナ・ディルスとの関係がどうなるか経過を見守つた方が良いと思います。脱走などなさらず、しばらく身をお隠しなつて下さい」

そして、入口の横に立つていたあの色素の薄い男のことを手で示した。

「彼は私の手の者で、ゾガと申します。腕が立ちますので、護衛として置かせていただきます。そしてこの修道院ですが、司祭が他の地へ移つたため現在空き家になつており、一時的な隠れ家として使用できます。村で何かあつた時は、ゾガが新任の司祭として対応いたします」

……祭司長のグレッドにとっては、各地の修道院はこんな使い道があるわけか。

「しかしここでは、仮に滞在が数年にも及ぶ場合は」「不便でしよう

から、近いうちに当初の予定通り私の……」

私は話を遮るように、首を横に強く振った。

「……シーゼ様？」

アコルがはつとしたりように、足元から私を見上げる。

「数年なんて嫌。私はなるべく早く、お城に帰りたいの。何年もかかつたら、帰れなくなると思う。だって……」

私は窓の外に目をそらして、苦笑した。

「久しぶりに会った自分の子どもに『誰?』って聞かれたら、私たぶん、この世界さえ自分の居場所じやなかつたんだって、感じそうだから」

外は曇り空で、そろそろ帰還するはずのシャンピの残照は見えなかつた。きっと今夜は、星明かりもない暗い夜だろう。

私は短いため息をつくと、グレッドとゾガの方を向いた。

「まあ、今の状況では何もできないし、しばらくはここで大人しくしてゐ。ゾガ、ね。よろしくお願ひします」

無口なゾガは、黙つて目礼した。

私は椅子を引きずつて窓の所まで行くとそこで腰かけ、窓枠にかけた両腕の上にあごを載せて、視界が窓でいっぱいになるようにした。少し疲れだし、外を眺めながら一人で考え事をしたかったのだ。後ろで、グレッドの抑えた声がした。

「メイラーと、アコル、だな。聞いての通りだ。ここでゾガとともに王妃様をお守りするなら、メイラーに武器を返す。そなたたちも望むところであるうし、こちらも動かせる人員が少ないのでな」

少し間があつて、メイラーとアコルが了承の意を返したらしい。人の動く気配に続いて、金属音がした。エン gland の宿からメイラーの長剣もちゃんと運んであつたんだろう。私を守らせるために二人を連れて來たんだ……と、頭の片隅で納得した。

翌日の真昼 “ソレスの睥睨^{へいがい}”と呼ばれる時間あたりまで、グレッドは修道院に滞在していた。でも、私が何も彼に質問しないし、

彼にも色々と仕事があるのだろう、

「数日後にはまた時間が取れますので、こちら伺います。何かありましたら、ゾガを通して連絡を」と言い残して王城に帰つて行つた。ここは王城からだいたい馬で半日の距離にあるらしい。

「ねえ……ダーナデイルス王国とハーヴェステス王国つて、大昔は戦争をしていたけど、今は普通に国交があるのよね」

私が聞くと、メイラーが答えた。

「はい。戦争があつたのはもう数百年も前、十代国王の頃ですね」「どちらかが勝つて終わつたの?」

「ハーヴェステスが勝つた形ではありますだが、終戦時にはどちらの国も疲弊していて、復興にはかなりの歳月がかかつたそうです」「そういえば」

アコルがお茶を淹れてくれながら言つた。さすが小姓喫茶の人気小姓だけあって、彼が淹れるお茶はとても美味しい。

「初めて異世界からの王妃召喚が行われたのも、その頃ですよ。確か十一代国王が最初じゃなかつたかなあ」

「ええ？ 最初がピンゾロ？ まさか、最初がそうだつたからその後もゾロ田とか変なキリ番で召喚やつてるんじゃないでしょうね」

「さ、さあ。その頃の記録は戦後の混乱であまり残つていないそうで……」

「ふうん」

私はショルダー・バッグを探ると、お茶菓子代わりに例の非常食のお菓子を取り出した。缶にいつぱい詰めてあります。

「何で召喚が伝統になつたんだろうね。最初に呼ばれた異世界人が、戦後の復興に何か貢献したのかな……まあ、それはともかくとして

お菓子の缶をメイラーに差し出す。今度は彼も一つつまんだ。

「王太后様が、ダーナ・ディルスの聖樹復活を警戒なさってる、って話が本当だとして。それならダーナ・ディルス側だって、聖樹のあるハーヴェステスをずっと恐れて来たはずだよね」

「そうですね。向こうから外交の特使が来るたびに、聖樹を視察して行かれてましたよ、確か」

アコルもお菓子をカリカリ。メイラーはお菓子を飲み込んで、「俺が思うに、ダーナ・ディルスは聖樹復活と同時に、ハーヴェステスと同等の地位に立とうとしてるんじゃないですかね。だとしたら軍事的な動きは、これから外交を優位に進めるための示威行動に過ぎない。まあ、無茶な要求を言ってくる可能性は無きにしも非ずですが」

と言った。

「そつか。即戦争かと思つてちょっとびびつたけど、そうだよね、戦争なんて大」とをそうそう簡単にあがつ！」

私は口元を抑えた。

「ど、どうされました」

「なんか噛んら。…………」

私は口元から手を降ろすと、お茶を飲みながら黙つて物思いにふけつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1247y/>

王妃様は逃亡中

2011年11月27日23時32分発行